新編中等國語讀本

新制版

卷九

375.9
Ka14
資料室

41479
教科書文庫
4
810
41-1938
20000
+54744

昭和十三年一月十七日
文部省檢定濟
中學校國語漢文科用
實業學校國語科用

新編中等國語讀本

広島大学
教
54744
図書

編者
金子元臣

新制版

資料室
375.9
Ka14

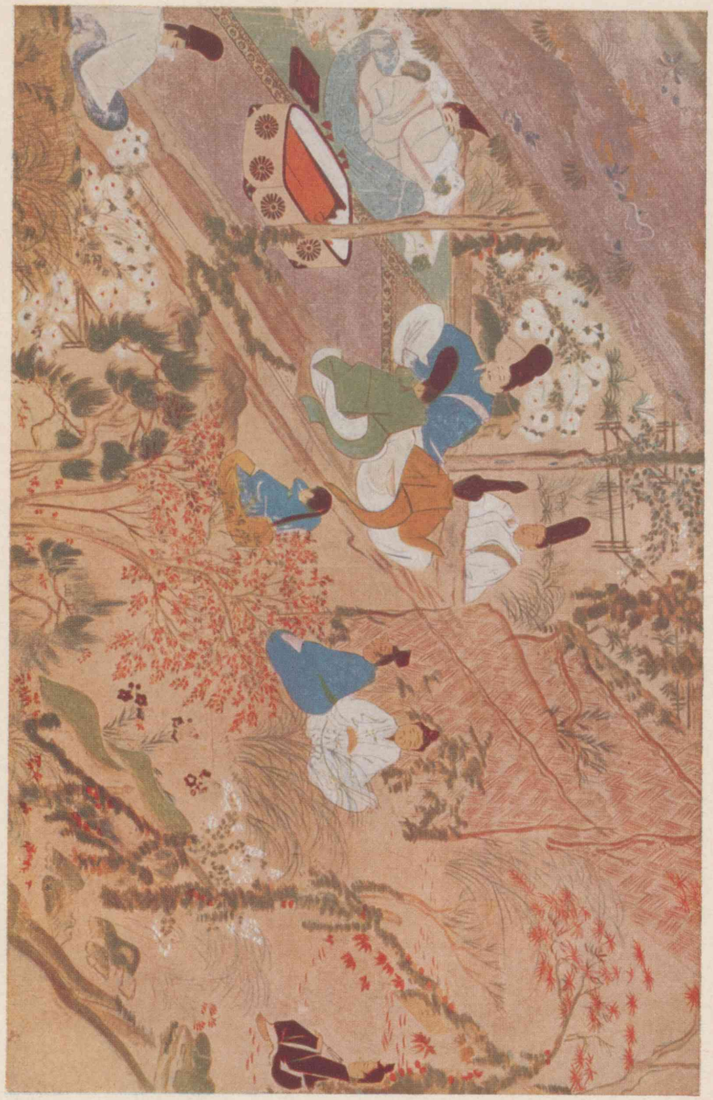
卷九目次

一　やまと心……河野省三……一
二　菅　公……高山樗牛……九
三　擧白のことば……木下長嘯子……一九
　一、山家四趣……一九
　二、し　み……二一
四　社會と感激……中澤臨川……三三
五　幣のおひ風……（土佐日記）……二七
　一、口　綱……二七
　二、三笠山の月……二八

三、京　入……三〇
六　いざよふ月……（十六夜日記）……三四
七　望の月……（竹取物語）……三八
八　和藤内……近松門左衛門……四一
九　成功の眞意義……綱島梁川……四九
一〇　鼻長き僧……（宇治拾遺物語）……五三
一一　有王島くだり……（平家物語）……五七
一二　海南小記の序……柳田國男……六七
一三　フランスの藝術……吉江喬松……七五
一四　元　朝（俳句）……八〇
一五　擬古文四篇……八二

一、蓮池の花……清水濱臣……八二
二、石濱の雨……加藤千蔭……八四
三、雪中眺望……橘守部……八七
四、漁村……中島廣足……八九
一六　法成寺……（榮華物語）……九二
一七　大原御幸……（平家物語）……九七
一八　孔子とその徒……安藤圓秀……一〇五
一九　赤壁賦に擬する文……伴蒿蹊……一一二
二〇　狂文三篇……一一五
一、鍾馗の贊……六樹園飯盛……一一五
二、鼠を責むる詞……四方赤良……一一六

三、浮　世……風來山人…二六
二　日本文學研究の新意義……藤村　作…二八
附錄　上古・中古文學一覽
近古文學一覽



公　管　二　（筆寶信原藤傳）卷繪起緣神天野北

新編

中等國語讀本（新制版）卷九

一　やまと心

越鳥は云々　文選の古詩の句、「胡馬依ニ北風一、越鳥巣ニ南枝一」。

「越鳥は南枝に巣くひ、胡馬は北風に嘶く」。あらゆる動物にそれぞれの習性があり、持ちまへの特質がある。人類にはその環境と歴史とを異にした所の多くの國民乃至民族があつて、それらがいづれもその遺傳性と環境と歴史的活動との異なるに伴つて、それぞれに異なつた文化を形成し、異なつた生活を展開してゐる。それはいづれもそれ等の異なつた事情の下に、異なつた民族性を發達させ、又その上に異なつた民族的信念を築き上げたからである。換言す

れば、世界の各國民若しくは各民族のそれぞれの特異なる活動乃至文化は、何れもその特殊なる傳統的情操及び信念に基づいてをるのである。

その傳統的情操といふのは、卽ち根本的國民性であり、民族性のことであつて、餘り議論を好まず、主義信仰を文字に表現することを得意としなかつた日本民族には、殊更この民族性が濃やかであつた。そこに「やまと心」といふ民族性に對する意識が深く發達したのである。

「やまと心」といふのは、日本民族の有する國民性の根本的特色であつて、遠く祖先以來訓練し育成して來た性情である。それは天地自然に育まれ、氏神の崇敬によつて練られ、我が國體によつて常に强調され、その他の種種の事情に因つて發達したものであつて、我が國體や文化現象や國民活動の根柢を爲す力である。近世の歌人

二川相近
筑前福岡藩の學者。幕末の人。大隈言道の師にして和歌及び書畫に長ず。

本居宣長
國學者。賀茂眞淵の門人。鈴の屋と號す。伊勢松阪の人。紀州侯に仕ふ。享和元年九月歿す。國學四大人の一。（一三九〇年—一二四六一年）

二川相近が詠んだところの、

花より明くるみ吉野の、春のあけぼの見せたらば、もろこし人も高麗人も、やまと心になりぬべし。

といふ、異邦人をも日本的に感化する日本民族の底力である。世に光格天皇の御製として傳へられてゐる

敷島のやまと錦におりてこそ
からくれなゐの色もはえあれ

といふ、その外來文化を包容し、同化して、大和錦に織り成す民族性である。その日本國民の民族性若しくは日本精神の底力となつてをる所のやまと心といふのは、本居宣長翁の歌はれたやうに、

敷島のやまとごころをひととはば
朝日ににほふやまざくら花

であつて、神神しく懷かしく清清しい心である。それが緊張して雄

吉田松陰　幕末の勤王家。長州藩士。名は矩方、通稱寅次郎。安政六年十月江戸に斬らる。（二四九一年—二五一九年）

藤田東湖　幕末の勤王家。水戸藩士。名は彪。烈公を輔佐す。安政二年江戸の大地震に壓死す。（二四六六年—二五一五年）

雄しくなれば、則ち吉田松陰先生の歌はれたやうに、

かくすればかくなるものと知りながら
止むに止まれぬやまとだましひ

となつて行くのである。優しくいへば物のあはれといふ情緒であり、強くいへば負けじ魂といふ意氣である。我等の祖先はこれを明き心といひ、藤田東湖はこれを天地正大の氣と稱し、現代人は清明心とも正しく明るい心とも稱してゐる。畢竟國學者の所謂まごころに外ならない。

やまと心には神神しさと懷かしさと清清しさといふ三つの根本的特色がある。神神しさといふのは、何かしら拜みたいといふやうな一種の神聖感である。眞劍な氣分、嚴肅な氣持、或は勿體ないとか、辱けないとかいふ心持が卽ちやまと心の神神しさである。この氣持が君臣の分嚴として定まるといふ我が國體の基礎觀念とな

つてをるのであつて、我が國民が儒教や佛教を生かしてをるのも、又到る所に鳥居を立てるのも、皆この神神しさの氣分の働いてゐる結果である。ここに太陽を禮讃する民族信仰の根柢がある。

次にやまと心の懷かしさといふ氣持は、優しい溫かい潤ひのある情緒であつて、日本人が大自然に親しみ、庭園や活花や盆栽などに深い嗜みを有し、俳句や和歌のやうなみやびな文化を發達させた心理的要求がここにある。義は君臣にして情は猶父子の如しといふ我が家族的國體の根柢は、實に懷かしい情操にあるのであつて、世界に日本民族ほどお懷かしい天子樣といふやうな氣持を持つてゐるものは殆ど無いであらう。前に述べた神神しさと、この懷かしさの性情が、卽ち忠孝一本といふ理想的な道德の根本的原理を成立せしめてゐるのである。

やまと心の清清しさといふ特性は、さつぱりとした氣持、あつさ

りとしたことを好む心持、若しくは素直な純な氣分をいふのである。所謂淡泊とか瀟洒とか、或は廉潔とか清楚とか、若しくは單純とか氣輕とかいふやうな氣持が、卽ち一言でいへば清清しさといふことに當るのである。禊祓の風習も、神社の神殿や調度も、或は神道が明淨正直の心を以て主要なる道德的精神と考へてゐるのも、更に又清明とか質素とか簡易とかいふやうなことが古典の重要な思想として考へられてゐるのも、いづれも、この清清しさを好むやまと心の特性に由るのである。

やまと心にかやうな著しい特性が存するから、やまと心の姿は正に朝日に映ずる山櫻の花を以てこれに譬へることが出來るのである。それは蓋し山櫻の花は、その形も色あひも正に懷かしい要素であるからである。太陽卽ち日は最も神神しいものであることはいふまでもない。而して朝こそは空氣も四邊の風物も悉く清新の氣分を以て充たされてをるから、如何にも清清しい。それで、山の櫻花が朝日に映じた時には、如何にも神神しく、懷かしく清清しいから、それは慥かにやまと心の特性のはたらきを最もよく表現してゐるといふべきである。東海の天に聳える富士山の姿にも、このやまと心の三大特性が感得されるが、我が國の到る所に鎭座する神社も、亦この神神しさと懷かしさと清清しさとを發揮してゐる。要するに神社も國旗もやまと心の具體化したものに外ならないのである。

以上のやうな特色を有する日本民族性若しくはやまと心を傳統的な性情として、茲に日本民族の傳統的な信念が形成されたのである。それ故、この傳統的な信念と情操とが基礎となり本質となつて、我が國體も、我が文化も、はた神道も神社も、而して又日本民族の生活も活動も歷史も展開してゐるのである。而して神道がその

日本民族の傳統的信念を、神かけて保持し、育成し、發揮してゐると同時に、この傳統的情操卽ちやまと心乃至日本民族性を深く重んじ、厚く育んでゐるところに、神道と日本民族の傳統的情操との特に密接なる關係が存するのである。そこで神道をこの根本的なる國民性の立場から檢討してみれば、それは神神しく懷かしく淸淸しい眞心、卽ち正しく明るい生活の道であるともいへるが、又國史を背景として、日本民族の表現した日本國民の信念として、次の如く定義付けることも出來るのである。

神道とは、皇室を奉戴し、神祇を崇敬して、明淨正直の生活を營みつつ、日本民族永遠の生命を展開するところの傳統的信念及び情操である。（河野省三―神道讀本）

河野省三　文學博士。國學院大學學長。埼玉縣の人。明治十五年生まる。

二　菅公

太宰府　福岡縣筑紫郡水城村にその址あり。

紅梅殿　京の五條坊門の北町にありき。

延喜元年二月一日、公京都を發して太宰府に赴く。從ふ者は小男と小女と、味酒安行と名づくる一門生とのみ。その子の官にあるものの、處を異にして盡く流竄せられ、その他、門下、郎等一人も公に伴へるものなし。夫人、女子亦隨ひ行くを許されず。ただ敕使藤原眞興等衞士若干人を率ゐて護送せるのみ。嗚呼昨は臺閣の寵臣、今は邊陲の遷客、何等の轉變、何等の悲慘ぞや。住み慣れし紅梅殿を出づる時、平生愛せる庭前の梅花を見て悽惻の情に勝へず、一首を詠じていはく、

こち吹かばにほひおこせよ梅の花
　あるじなしとて春なわすれそ

また櫻樹に結びつけたる歌に、

櫻花ぬしを忘れぬものならば
　吹きこむ風にことづてはせよ

京を離れて後數日、夫人に送れる歌あり。

君がすむ宿のこずゑをゆくゆくも
　かくるるまでに反り見しはや

敕使藤原眞興は攝津において公に別れ、右衞門少尉善友益友、衞士二人を率ゐ、代つて筑紫に赴く。當時の太政官の官符を見れば、公は殆ど純然たる囚人にして、任中俸を賜はることもなかりしなり。

公の前途や實に慘憺たりと謂ふべし。かの白樂天が北窓三友を想うて、二十八韻の詩を作りたるは蓋しこの時なり、中に自ら境遇を述べていはく、

自從敕使驅將去、　父子一時五處離、
口不能言眼中血、　俯仰天神與地祇、

白樂天　唐の詩人、名は居易。樂天はその字。香山と號す。官刑部尚書に至る。（西暦七七三年―八四七年）

三友　琴、詩、酒。

二十八韻の詩　本文はその後半なり。

東行西行雲渺渺、　二月三月日遲遲、
重關警固知聞斷、　單寢辛酸夢見稀、
山河邈矣隨行隔、　風景黯然在路移、
平到謫所誰與食、　生及秋風定無衣、
古之三友一生樂、　今之三友一生悲、
古不同今今異古、　一悲一樂志所之。

字字人の腸を斷つ。行き行きて河内の國土師の里に至り、道明寺に次る。道明寺は菅家歷代の菩提寺にして、當時菅公の姨覺壽尼あり。蓬萍一たび別れなば、いづれの時を期してか相會するを得ん。公惜別の情を歌うていはく、

鳴けばこそわかれをいそげ鷄の音の
　きこえぬ里のあかつきもがな

播磨の國明石の驛に宿れる一夜、驛長公を見てその轉變の甚しき

土師の里　大阪府南河内郡道明寺村の舊稱。

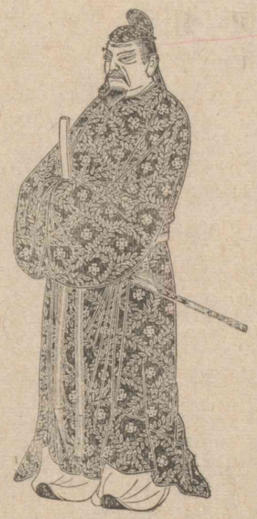
道明寺　一に土師寺といふ。今は眞言宗の尼院。

明石の驛　今の兵庫縣明石市大字大藏谷にあり。

に驚く。公乃ち一聯を作りて自ら慰めていはく、

驛長莫レ驚時變改、一榮一落是春秋。

山河邈たり行くに隨つて隔たり、風景黯然として路に在つて移る。長亭短亭幾たびか公を送迎し、日を積み月を重ねて、公は遂に太宰府の配處に到る。

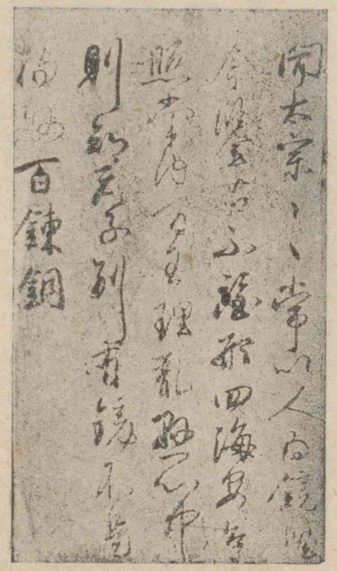


菅公（橋本雅邦筆）

太宰府の配處は公に取りて絶好の詩境なりき。外に名利の競爭あるなく、內に危殆の憂悶なし。公や靜かに往時を懷慕し、現境を思料し、詠歎によりてその衷情を遣るべきなり。天は公に授くるに詩人の天分を以てし、而してまづ公に與ふるに政治家の境遇を以てしたりき。公の政治家たりしや煩惱內に公を苦しめ、讒奸外に公を陷れ、遂に公をして無告の流人たらしめき。然れ

ども、悲しいかな、かくの如くなるにあらずんば、公は遂に詩人たる能はざりしならん。しかも公は死に至るまでこの天分の地に居るを悲しみ、靜かに春秋の榮落を觀じて、何時か昔日の榮華に歸るあらんことを望みたりき。この憂愁と希望との現るるところに、公の天分は遂に大成せられたり。而して、公みづからは毫もこれを知らざりしなり。嗚呼天道の冷酷無情、一に何ぞここに至るや。

太宰府における公の詩は甚だ多からず。然れども一言一句と雖も性靈の聲ならざるはなし、文字時に洗煉ならず、藻思必しも巧緻ならずと雖も、眞情常に紙面に汪溢して、公の面目躍如たるをおぼゆ。これを南海の詩に較ぶ



傳菅原道眞筆

（我有二一首一）聞二太宗一太宗常以レ人爲レ鏡、鑒レ今鑒レ古不レ鑒レ形、四海安危照二掌內一、百王理亂照二心中一則知天子別有レ鏡、不二是揚州百錬銅一。

南海の詩　讃岐守在任中の作。

紀長谷雄　從三位中納言。文章を以て重んぜらる。延喜十二年二月薨ず。（一五〇五年―一五七二年）

都府樓　福岡縣筑紫郡水城村に、その址あり。

觀音寺　觀世音寺。同村にあり。西海道敕建の戒壇にて九州第一の貴寺たりき。

れば、意更に摯實、情更に痛切、感極まるところ往往人をして卒讀に堪へざらしむ。詩もここに到りては徒らに技巧のみにあらざるなり。薨ずる前集めて一卷となし、封緘して紀長谷雄に送る。長谷雄これを見、天を仰いで歎息せりといふ。今のいはゆる菅家後集と稱するものこれなり。今左にその五六を摘錄せん。

自詠

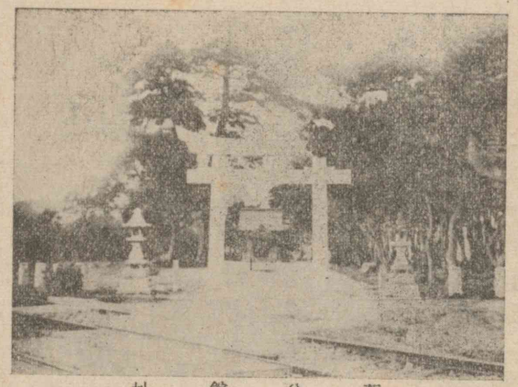
離家三四月、落淚百千行、
萬事皆如夢、時時仰彼蒼。

これ後集卷頭の詩なり。公が昨今の轉變眞に一夢に較ぶべし。その筑紫に在るや、門を杜ぢて一步も外に出でず。都府樓近しと雖も纔かに瓦の色を望み、觀音寺遠からずと雖もただ鐘の聲を聞くのみ。警吏の門を守るにあらざれども、公みづから檢束して遙かに謹愼の意を致ししなり。その詩にいはく、

不出門

一從謫落在柴荆、萬死兢兢跼蹐情、
都府樓纔看瓦色、觀音寺只聽鐘聲、
中懷好逐孤雲去、外物相逢滿月迎、
此地雖身無檢繫、何爲寸步出門行。

秋氣やうやく催して、旅雁わたること頻なり。憐むべし、公はなほ何時かは京都に還る日あるべきを思量して、一縷の望を繫ぎしなり。たまたま旅雁を見て遙かに情を託す。何ぞそれ悽愴たる。



菅公館址

聞旅雁

我爲遷客汝來賓、共是蕭蕭旅漂身、
欹枕思量歸去日、我知何歲汝明春。

重陽の佳節は來れり。しかも公は唯ひとり敗屋の下に愁臥するのみ。遙かに去年の今夜清涼に侍せしを憶へば、感慨何ぞ勝へん。有名なる九月十日の絶唱は、實にこの感慨を敍べたるなり。

九月十日

去年今夜侍清涼、　秋思詩篇獨斷腸、
恩賜御衣今在此、　捧持毎日拜餘香。

十日去つて十五日來る。月光鏡に似たれども罪を明かにする無く、風氣刀の如くなれども愁を破るに由なし。顏容日に衰へて、千里誰にか訴へん。卽ち唱うていはく、

秋夜

黃萎顏色白霜頭、　況復千餘里外投、
昔被榮華簪紐縛、　今爲貶謫草萊囚、
月光似鏡無明罪、　風氣如刀不破愁、

隨見隨聞皆慘慄、　此秋獨作我身秋。

罪無くしてこの流竄に遇へりと雖も、公は一度も君王の不明を恨み、奸臣の讒構を怒りしことあらず。偏に一身の不遇を歎じて天命の否塞を悲しみたるのみなりき。唯その身の罪無くして汚名を千歲に遺すは、公の忍ぶ能はざるところなり。故に公の詩、輒もすればこの事に及ぶ。されどかくの如き境遇にありて、なほ君恩を感謝す。以て公の性格の甚だ高くして且美なるを見るべきなり

漢詩の外、公に和歌の詠あり。又以て當時の境遇を想ふべし。

ある夕べをちかたに煙のたつを見て
夕されば野にも山にも立つけぶり
　なげきよりこそ燃えまさりけれ

雲の浮き漂ふを見て
山わかれ飛びゆく雲のかへり來る

かげ見る時ぞなほたのまるる

雨のふる日

あめの下かわける程のなければや

著てしぬれ衣干るよしもなき

野をよめる

つくしにも紫おふる野邊はあれど

なき名かなしむ人ぞきこえぬ

延喜三年二月二十五日、公はかくの如き慘憺たる事情の下に病歿せり。時に年五十九。京師を出でしより二箇年餘。墓所を安樂寺といふ。越えて二年、公の隨臣味酒安行始めて神殿を安樂寺に立て、天滿大自在天神と稱せり。かくの如く、太宰府の左遷は、啻に公をしてその詩人の天分を全うせしめたるのみならず、その人物の上にも一層の品位を加へしめたるなり。（高山樗牛――菅公傳）

安樂寺　福岡縣筑紫郡太宰府村にあり。太宰府神社のある地。

高山樗牛　文學博士。名は林次郎。仙臺の人。雜誌太陽に文藝評論の筆を揮ひて文名ありき。明治三十五年十二月歿す。（一五三一年―一五六二年）

王右軍　王羲之をいふ。右將軍たりしを以てなり。羲之は晉の人。字は逸少。書に巧に、尤も隸書を善くし、古今に冠たり。（西暦三二一年―三七九年）

巨勢の某　巨勢金岡をいふ。

山を十五重に云云　花鳥餘情に雅兼卿記を引きて「金岡は疊山十五重也」とあり。

三　舉白のことば

一、山家四趣

蓬の門をさしこめ、松の扉に明けくるるけはひのどやかに、筧の水たえだえなり。心を天地の外に遊ばしめ、生を養ふに障なし。ひとり南の窓によりゐて、墨こまやかにおし磨りつつ、王右軍が石摺のあと、こと更にまねばねど、そこはかとなく、眞草うちまぜ亂れ書きて、なほざりに日を消し、徒らに紙筆を費す。

繪もかかまほしきこと多かり。草木のたたずまひ、露の置きあまる夕べ、霜の結ぼほる朝、心に浮ぶ趣はあれどかひなし。山のそびえ、雲霧のすがた、時のまに消えて、又たなびく氣色さびしく、暮るる夕日の色薄く、黃ばめる影のさし入りたる窓のうち、いはむ方なき折折は、昔ありけむ巨勢の某といひし人はた羨まし。山を十五重に疊

めりとかいひ傳へし。

琴はをさをさ操る業を知り侍らねど、見るにも慰む心ちすれば、いとむつまじくて傍に置けり。姿のあらく音のすこしを顧はず、常に君子の膝のべに枕せむことを思ふと、娘子に化して帥の大伴卿が夢に見えし心ならば、我をも厭ふにやあらむ。緒は絶えゆくままに、さながら晉の徵士、無絃の琴に似たらむ。やをら撫でてもまことの聲をさとり知りけるなるべし。彈かぬを妙なりといひけむ人のことを聞き傳ふるにも、いよいよ心澄まざるにはあらず。

香は清くすずしき匂の花やかなるものから、流石にうちしめりつつ、誇りかならず、思ふゆゑありて魂をやどし、幽なることを司るものなれば、氣むすぼほれものむづかしき折は、かならず一炷を親しまずといふことなし。

すべて山里のあはれいひ盡すべきにあらねば、みな書きさしつ。

姿のあらく云云
萬葉集卷五に「此琴、夢化娘子曰、不顧賤貧、願奉君子左右。謹音少徒希君子左右。」

帥の大伴卿
太宰帥大伴旅人。奈良時代の武將、歌人。太宰帥、大納言等に歷任す。天平三年薨ず。（一三二五年―一三九一年）

晉の徵士
陶淵明をさす。

無絃の琴
淵明の詩に「已得二琴中趣一、何弄二絃上聲一。」

ひとへに靜かなるを業とし、安きを事として、ただこのあるじとなりおほせたるを喜ぶ。ここにして百里が牛を飼はばよく肥えつべし。

二、しみ

このごろ書どもさらす中に、紙魚といふ蟲の多かるを、拂ひ棄つるもさすがに覺えて、

こころとめ書みし人のなきたまや
　思へば飽かぬしみとなりけむ

一生書のなかにて世をつくすも、いかなる契にかとあはれなり。來世若し佛とやらむいふものになりそこなひたらば、己も一定このものには成りぬべくこそ。（木下長嘯子―學白集）

百里が牛
史記秦本紀に「周王子頽好レ牛、臣以レ養レ牛于レ之」といふ百里傒の語あり。

木下長嘯子
江戸初期の歌人。名は勝俊。家定の子。若狹小濱の城主。後封を奪はれ、京都東山に幽居す。慶安二年三月歿す。（一二二九年―一三〇九年）

四　社會と感激

一日一刻感激がなければ、その社會は遲滯する。感激のない社會は、丁度水の死んだ沼のやうなもので、子子のわき、枯葉の腐るに任せる外はない。生命の源から涌き出す活泉の絶えた社會ほど、みじめなものはなからう。「いつそのこと太く短くこの世を送りたい」といふやうな歎は、感激のない社會に生存する者の、自然に洩らす倦怠の聲である。

社會は一種の大きな自動機械で、誰をでもその因襲と機械律のもとに囚へ搬ばうとする。多くの人は、この社會の壓制に馴れて、無自覺に一瞬の自由をも知らずに、「自我」の面影を見る機會もなくて醉生夢死する。一人感激を欲し自由を希ふ者があつても、その人の力の餘程偉大でない限は、彼も亦終には、重い軛を身に負はされて、同一の運命に終らざるを得ない。人は生命の感激に生き、人は社會の因襲に死ぬ。

感激に生きる者の一刻は、いかなる富貴を以てしても代へ得ないほど貴いものである。藝術家や宗教家の生活が、能くこれを證明してゐる。陋巷に窮死する名匠の一生を憐む者は、憐む者が愚である。人は世間並に立派だと思はれる生活をして、他も羨み、自分も滿足してゐながら、ある動機から急に從前の生活が虛僞の塊であつたことに氣の付くことがある。

昔アレキサンダー・セヴェラスの時代に、羅馬に一人の男があつた。彼は怜悧な工匠であつた爲に、その名譽は擧り、その財囊は常に

アレキサンダー・セヴェラス　ローマ皇帝マルクスアウレリウスのこと。（西暦二〇五年―二三五年）

滿ちてゐた。彼は樂しい家庭に住まひ、愉快な交際社會へも出入した。彼は日毎滿足の朝に目覺めては樂しく仕事を迎へた。これほど安泰な生活が、またと世にあらうか。然るに一日、或不安が彼の心を襲つた。彼は急に宗教上の狂熱に捉へられた。生命の嵐が落ち著き拂つた羅馬の街街を吹き捲つて、その姿を一變させたやうに彼には思はれた。古い帝王の都は、その一つの塵の位置をだに變へないのであつて、變つたのはただ一住民の心であつた。その日から彼の目に映るあらゆる事物が、新しい意味を彼に齎して、彼自身が奇蹟と法悅の中心であるかに見えた。彼は永く囚れてゐた皮相な社會的生活の滿足から遁れて、絕えざる感激の新生命に入つたのであつた。

誰が彼を羨んだであらう。恐らく當時の人は、その後の彼の行狀を笑つたに違ない。それほど社會的慣習と惰性とは、世間の人の心に喰ひ入つて、彼等の感覺を鈍らせ、彼等の魂に目隱しを施してゐるのである。しかし、その癖彼等は、無意識の間に何等かの感激を待ちこがれてゐる。彼等はかつ疑ひかつ恐れながら、生命の慈雨を望んでゐる。社會的因襲の牢獄は、永く彼等の耐へ得るところでない。そこで、或ものは感激の惠を宗教に求め、或ものはこれを藝術に求め、或ものはこれを直接行爲に求めようとする。求めて得ざるものの墮落は悲慘であつて、これ實に社會の日日行ひつつある罪惡である。

生命の源に溯り、感激の泉を汲まうとするのは、人生の常である。然るに社會がこれを阻止する。社會は、廣い生命の爲の方便でなければならないにも拘らず、生命の直接要求と社會との間には、常に

何等かの間隙があり、撞著がある。感激を阻止する社會は最も惡い社會であり、共同的感激のない社會ほど住むに値しない社會はない。

私は安惰な生活の百年よりも、感激の一日の貴さを想見せざるを得ない。

私は我が邦の維新前後に遭遇した人達を羨む。進んでは、元龜、天正の戰國時代に生まれた人達の運命をさへ羨望しようとする。我等の自由性は、必しも身體財産の安全を以て滿足し得られるものではない。我等は高潮した感激に由つてのみ求め得らるる眞自我の自由を欲するのである。

重ねていふ、感激のない社會ほど惡い社會はない

（中澤臨川―破壞と建設）

元龜、天正　共に正親町天皇の御代の年號。

中澤臨川　評論家、工學士。名は重雄。長野縣の人。大正九年歿す。（一五三八年―一五八〇年）

五　幣のおひ風

一　口綱

二十七日。鹿兒の崎といふ所に、守のはらから、又こと人かれこれ酒などもて追ひ來て、磯におり居て別れ難きことをいふ。守の館の人人の中に、この來る人人ぞ心あるやうにはいはれほのめく。かく別れがたくいひて、かの人人の口綱も諸持にて、この海邊にて、荷ひ出だせる歌、

惜しと思ふ人やとまると葦鴨の
うち群れてこそ我は來にけれ

といひてありければ、いといたく愛でて、行く人の詠めりける、

棹させど底ひ知られぬわたつみの
ふかきこころを君に見るかな

二十七日　承平五年十二月。

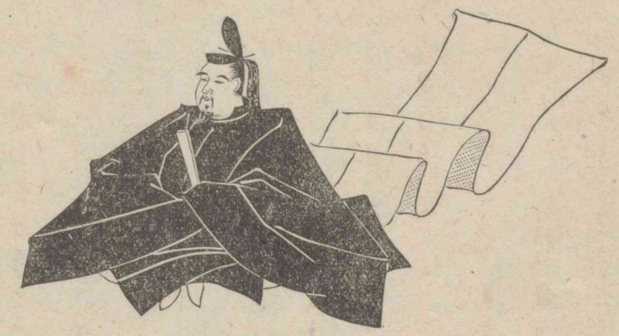
鹿兒の崎　高知縣長岡郡。

甲斐歌　古今集、詠者不詳「甲斐がねをさやにも見しかけれなく横おりふせるさやの中山」。

浦戸　高知縣吾川郡の東。

二十日　承平六年正月。

といふ間に楫取物のあはれも知らで、おのれし酒をくらひつれば、早くいなむとて、「潮満ちぬ、風も吹きぬべし」と騒げば、船に乗りなむとす。この折にある人人、折節につけて、唐歌ども時に似つかはしきをいふ。又ある人、西國なれど甲斐歌など歌ふ。かく歌ふに、「船屋形の塵もちり、空ゆく雲もただよひぬ」とぞいふなる。今宵浦戸にとまる。



紀貫之（信實筆）

二、三笠山の月

二十日　昨日のやうなれば船いださず。皆人人うれへ歎く。苦しく心もとなければ、唯日の經ぬる數を、今日いくか、二十日、三十日と數ふれば、おとびも損はれぬべし。

安倍仲麿　船守の子。靈龜二年遣唐留學生となり、寶龜元年唐に客死す。（一三六一年―一四三〇年）

夜はいも寢ず。いとわびし。二十日の月出でにけり。山の端もなくて海の中よりぞ出でくる。かやうなるを見て、昔安倍の仲麿といひける人の、もろこしに渡りて歸り來る時に、船に乗るべき所にてかの國人うまのはなむけし、わかれ惜しみて、かしこの唐歌作りなどしけり。飽かずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。この月は海よりぞ出でける。これを見て仲麿のぬし、「わが國にはかかる歌をなむ、神代より神も詠みたび、今はかみ、なか、しもの人も、かうやうに別れ惜しみ、よろこびもあり、悲みもある時には詠む」とて詠めりける、

青海原ふりさけ見れば春日なる
　みかさの山にいでし月かも

とぞ詠めりける。

かの國の人聞き知るまじう覺えけれども、ことの心を男文字に

ある人　紀貫之の自稱。

十六日　承平六年二月。

山崎　京都府乙訓郡。

小櫃

島阪　山崎の附近。

さまを書き出だして、ここの詞傳へたる人にいひ知らせければ、ころをや聞き得たりけむ、いと思の外になむ愛でける。もろこしとこの國とは詞異なるものから、月の影は同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。さて今そのかみを思ひ遣りてある人の詠める歌、

都にて山の端に見し月なれど
海よりいでて海にこそいれ

三、京入

十六日。けふの夕つ方、京に上るついでに見れば、山崎の店なる小櫃の繪も、まがりの法螺の形も變らざりけり。「賣る人の心をぞ知らぬ」とぞいふなる。かくて京へ行くに、島阪にて人あるじしたり。必しもあるまじき業なり。立ちて行きし時よりも、くる時ぞ人はとかくありける。これにもそれにも返りごとす。

桂川　今は京都市右京區。大堰川の下流。

飛鳥川にも云云　古今集、詠者不詳、「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀬になる」。

夜になりて京に入らむと思へば、急ぎしもせぬほどに月出でぬ。桂川月あかきにぞ渡る。人人のいはく、「この川飛鳥川にもあらねば、淵瀬更にかはらざりけり」といひて、ある人の詠める歌、

久方の月に生ひたるかつら川
底なる影もかはらざりけり

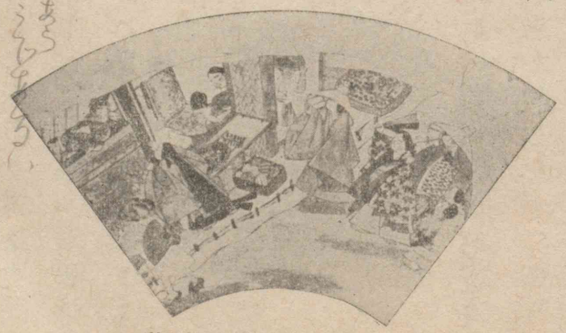
又ある人のいへる。

あま雲のはるかなりつる桂川
袖をひでても渡りぬるかな

又ある人詠める、

かつら川わが心にも通はねど
おなじ深さに流るべらなり

京の嬉しきあまりに歌もあまりぞ多かる。夜更けてくれば處處も



見世棚（扇面寫經）

見えず。京に入り立ちてうれし。

家に到りて門に入るに、月あかければ、いとよくあり樣見ゆ。聞きしより勝りていふかひなくぞこぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も荒れたるなりけり。中垣こそあれ一つ家のやうなれば、望みて預かれるなり。されば、たより毎に物も絶えず得させたり。こよひかかる事と聲高に物もいはせず。いとはつらく見ゆれど、志はせむとす。

さて池めいてくぼまり水づける所あり。ほとりに松もありき。五年六年の中に千年や過ぎにけむ、片枝はなくなりにけり。今生ひたるぞまじれる。大方みな荒れにたれば、あはれとぞ人人いふ。思ひ出でぬ事なく思ひ戀しきが中に、この家にて生まれし女子のもろともに歸らねば、いかがは悲しき。船人もみな子抱きてののしる。かかるうちになほ悲みに堪へずして、ひそかに心知れる人といへりける歌、

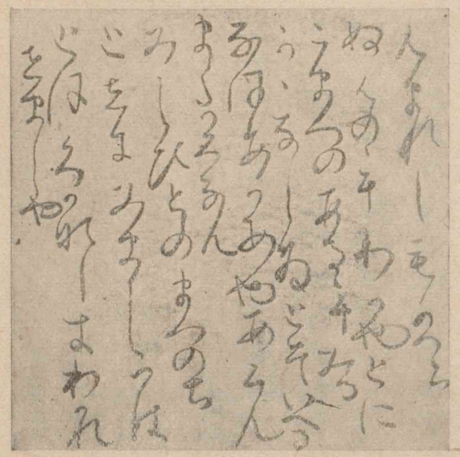
生まれしも歸らぬものをわが宿に
小松のあるを見るがかなしさ

とぞいへる。尙飽かずやあらむ、又かくなむ、

見し人を
松の千年に
見ましかば
とぼくかなしき
別れせましや

忘れ難く口惜しきこと多かれど、え盡さず。とまれかくまれ疾くやりてむ。（土佐日記）

んまれしもかへらぬものをわがやとにこまつのあるをみるがいなしさとぞいへるなほあかすやあらんまたかくなん
みしひとのまつのちとせにみましかはとほくかなしきわかれせましや



土佐日記（藤原定家筆）

書の名
孝經のこと。孔安國の序に、「魯恭王使二人壞二夫子講堂一、於二壁中石函一、得二古文孝經廿二章一」。

神樂の詞
「あはれあなおもしろ、あなたのし、あなさやけ、おけ」。世を治め云云紀貫之の古今集の序に見ゆ。

六　いざよふ月

むかし壁の中より求め出でたりけむ書の名をば、今の世の人の子は、夢ばかりも身の上の事とは知らざりけりな。みづぐきの岡の葛葉、かへすがへすも書き置けるあとたしかなれども、かひなきものは親のいさめなり。また賢王の人を捨て給はぬ政にも漏れ、忠臣の世を思ふなさけにも捨てらるるものは、數ならぬ身一つなりけりと思ひ知りながら、又さてしもあらで、尚このうれへこそ遣る方なく悲しけれ。

更に思ひ續くれば、大和歌の道は、ただ誠すくなく、あだなるすさびばかりと思ふ人もやあらむ。日の本の國に天の岩戸開けし時、よもの神たちの神樂の詞をはじめて、世を治め、物をやはらぐる媒となりにけるとぞ、この道の聖たちは記し置かれたりける。さてもま

二たび敕を云云
藤原定家、再度敕を奉じて新古今集と、新敕撰集とを撰し、その子爲家も亦二たび敕を奉じて續後撰集と續古今集とを撰したり。

三人のをのこ
俊成―定家―
―爲家―爲氏
―爲教
―爲顯（以下四條出）
―爲相
―爲守

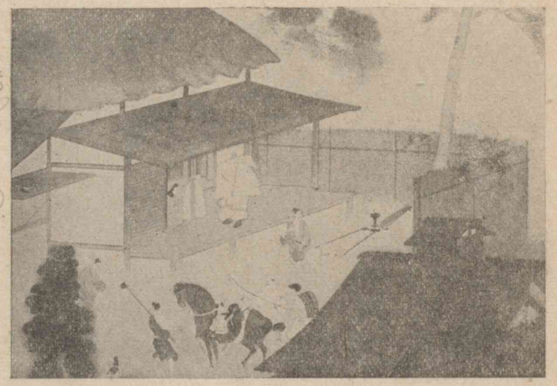
細川
兵庫縣美囊郡。

子をおもふ心の闇
後撰集、藤原兼輔「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に

た集を撰ぶ人はためし多かれど、二たび敕を受けて代代に聞えあげたるは、たぐひ尚あり難くやありけむ。そのあとにしも携はりて、三人のをのこ兒ども、百千の歌の古反古どもを、いかなるえにかありけむ、預かりもたることあれど、「道をたすけよ、子をはぐくめ、後の世をとへ」とて、深き契をむすび置かれし細川の流も、故なく堰きとめられしかば、迹とふ法の燈火も、道をまもり家をたすけむ親子の命も、もろ共にきえを爭ふ年月を經て、あやふく心細きものから、何としてつれなく今日までは永らふらむ。惜しからぬ身一つは易く思ひ捨つれども、子を思ふ心の闇はなほ忍びがたく、道を顧みるうらみは遣らむ方なく、さても尚あづまの龜の鑑にうつさば、曇らぬ影もや現るると、せめて思ひ餘りて、よろづの憚を忘れ、身をえうなきものになし果てて、ゆくりもなくいざよふ月に誘はれ出でなむとぞ思ひなりぬる。

まどひぬるかな」。
み冬たつはじめ云云　建治三年十月。
人やりならぬ云云　古今集、源實、「人やりの道ならなくに大方はいきうしといひていざ歸りなむ」。
侍從　爲相。冷泉家の祖。正二位權中納言に至る。嘉暦三年鎌倉に薨ず。（一九二三年―一九八八年）
大夫　爲守。後出家して曉月といふ。

頃はみ冬立つはじめの定めなき空なれば、降りみ降らずみ時雨も絶えず、嵐にきほふ木の葉さへ、涙と共に亂れ散りつつ、事に觸れて心ぼそく悲しけれど、人やりならぬ道なれば、いき憂しとてもとどまるべきにもあらで、何となく急ぎ立ちぬ。目離れせざりつる程だに、荒れ増りつる庭も籬も、ましてと見まはされて、慕はしげなる人人の袖の雫も慰めかねたる中にも、侍從、大夫などのあながちにうち屈したるさま、いと心苦しければ、さまざまいひこしらへぬ。



阿佛尼出立（岩田正己筆）

代代に書き置かれける歌の草子どもの奥書などして、あだならぬ限を選りしたためて、侍從のかたへ送るとて書き添へたる歌、

わかの浦にかきとどめたる藻鹽草
これを昔のかたみとも見よ

あなかしこ横波かくなはま千鳥
一かたならぬ迹をおもはば

これを見て、侍從の返りごと、いと疾くあり。

つひによもあだにはならじ藻鹽草
かたみを三代のあとに殘せば

迷はましをしへざりせば濱千鳥
ひとかたならぬ迹をそれとも

この返りごといとおとなしければ、心安くあはれなるにも、昔の人に聞かせ奉りたくて、又うちしほたれぬ。（十六夜日記）

赫奕姫　竹取物語中の女主人公。

七望の月

三年ばかりありて、春の初めより、赫奕姫、月の面白う出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。ある人の、「月の顔見るは忌むこと」と制しけれども、ともすれば人まには月を見て、いみじく泣き給ふ。文月の望の月に出でゐて、せちに物思へるけしきなり。

近く使はるる人人、竹取の翁に告げていはく、「赫奕姫、例も月をあはれがり給ひけれども、この頃となりてはただ事にも侍らざめり。いみじく思し歎くことあるべし。よくよく見奉らせ給へ」といふを聞きて、赫奕姫にいふやう、「なでふ心地すれば、かく物を思ひたるさまにて月を見給ふぞ。うましき世に」といふ。赫奕姫「月を見れば、世の中心細くあはれに侍り。なでふ物をか歎き侍るべき」といふ。赫奕姫のある所に至りて見れば、なほ物思へるけしきなり。これを見て、あが佛、何事を思ひ給ふぞ。思すらむこと何事ぞ」といへば、「思ふこともなし。物なむ心細くおぼゆる」といへば、翁「月な見給ひそ。これを見給へば物思すけしきはあるぞ」といへば、「いかでか月見ずてはあらむ」とて、なほ月出づれば出で居つつ歎き思へり。夕闇には物思はぬけしきなり。月のほどになりぬれば、なほ時時はうち歎き泣きなどす。これを、使ふ者ども、「なほ物思すことあるべし」とささやけど、親をはじめて何事とも知らず。

竹取物語繪巻（宮内省藏）

葉月望ばかりの月に出で居て、赫奕姫いとといたく泣き給ふ。人目も今はつつみ給はず泣き給ふ。これを見て親ども、「何事ぞ」と問ひさ

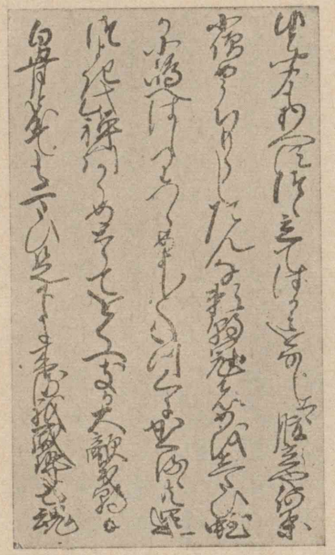
わぐ。赫奕姫泣く泣くいふ「さきざきも申さむと思ひしかども、必ず心惑はし給はむものぞと思ひて、今まですぐし侍りつるなり。さのみやはとてうち出で侍りぬるぞ。おのが身はこの國の人にもあらず。月の都の人なり。それを昔の契ありけるによりてなむ。この世界にはまうで來たりける。今は歸るべきになりにければ、この月の望に、彼のもとの國より、迎に人人まうで來むず。さらばまかりぬべければ、思し歎かむが悲しきことを、この春より思ひ歎き侍るなり」といひて、いみじく泣く。翁「こはなでふ事をのたまふぞ。竹の中より見つけ聞えたりしかど、栄種の大きさおはせしを、我がたけ立ち竝ぶまで養ひ奉りたるわが子を、何人か迎へ聞えむ。まさに許さむや」といひて、「われこそ死なめ」とて、泣きののしることといと堪へがたげなり。（竹取物語）

親子　鄭芝龍夫婦とその子和藤内と。

候と聞もあへず、つゝ立てはがみをなし、エゝ腹立や、何條小僧めうちもらしたんな、頼朝冠者めをしたひ、蛭が小島へはしりつらめ。よし〳〵いづくにかくるゝ共、運つよき此禪門、からめとらでなくべきか。大敵義朝も、白骨と成ても、二たび足下に來る我威勢、亡魂。

八　和藤内

船路の末も知らぬ火の、筑紫は雲にかくるれど、あとに應護の神風や、千波萬波をおし切つて、時も差へず親子の船、唐土の地にも著きにけり。鄭芝龍一官は、故郷へかへる唐錦、裝束ひきかへ妻子に向ひ、「わが本國といひながら、時移り代かはり、天下悉く李蹈天が引きいれにて、韃靼夷の奴となり、昔の朋友一族とて、誰を尋ねんやうもなく、司馬將軍吳三桂が生死のほども知れざれば、いかでか義兵を擧げ、一城にたて籠らん處あるべき。然るに、われ去る天啓五年、國を立ち退き、日本へ渡りし



近松門左衛門筆

娘の子　錦祥女といふ。

潯陽の江　江西省九江府。

赤壁　湖北省武昌府嘉魚縣の西。

時、二歳になりし娘の子を、乳母が袖に捨て置きしが、その子が母は、産み落してぢきに死し、かくいふ父は、八重の汐路の中絶えて、いつゐた父母も知らぬ身が、育てば育つ草木の、雨露の恵に長ずる如く、天地の父母の助にや、成人して今、五常軍甘輝といふ大名、一城の主の妻となれる由、商人の便に開き及べり。頼む方はこればかり、親を慕ふ心あつて、娘だに承引せば、壻の甘輝も、やすやすと頼まるべし。これより道の程百八十里、うち連れては人も怪しまん。われ一人道をかへ、和藤内は母を具し、日本の獵船の吹き流されしと、頓智を以て人家に憩ひ追ひ付くべし。これより先は、音に聞ゆる千里が竹とて、虎の棲む大藪なり。これを過ぐれば、潯陽の江、これ猩猩の棲むところ。風景聳えし高山は赤壁とて、昔、東坡が配所ぞや。それよりは、甘輝が在城獅子が城へは程もなし。その赤壁にて待ちあひて、萬事を示しあはすべし」と、方角とてもしら雲の、日影を心おぼえにて、東西へこそ別れけれ。

父の教にまかせ、和藤内、人家を求め忍ばんと、かひがひしくも母を負ひ、たづきも知らぬ荒山中、古木の根ざしたぎつ波、飛び越え跳ね越え、飛鳥の如く急げども、末はてしなき大明國、人里絶えて廣廣たる、千里が竹に迷ひ入る。和藤内、ほうと我をぬかし、「なう母者人。この脚骨に覺あり。もう四五十里も來ませうが、人にも猿にも遭ふことか、行けば行くほど藪の中。むう解つたり、方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶるよな。魅さば魅せ、宿なし旅のゆきつき次第、小豆の飯の相伴」と、根笹大竹押し分け踏み分け、尚奥深くゆく先に、怪しや數萬の人の聲、攻鼓攻太鼓、喇叭、チャルメラ、高聲をそらし、ひやうひやうとこそ聞えけれ。すは、われわれを見咎めて、敵の取り卷く攻太鼓か。又は狐のなす業か」と、茫然たるその折ふし、空すさまじく風起り、砂を穿ち、どうどうどう、竹葉さつと卷き立て卷き立て、吹き折る竹は劍の

虎嘯けば風起る　古樂府に、「虎嘯谷風起」。

西天　印度のこと。

如く、すさまじといふも愚なり。和藤内、ちつとも臆せず、「よめたりよめたり。さては異國の虎狩よな。あの鉦、太鼓は列卒の者、此處は聞ゆる千里が原、虎嘯けば風起る。猛獸の所爲と覺えたり。唐に渡つて力はじめ、刃で向ふは大人氣なし。虎はおろか象でも鬼でも一挫ぎ」と、尻引つからげ身繕ひ、母を圍うて立つたるは、西天の獅子王も恐れつべうぞ見えてける。

案に違はず吹く風と、共に荒れたる猛虎のかたち、藤根に頰を摺りつけ摺りつけ、岩角に爪磨ぎ立てて、二人を目がけいがみかかるを事ともせず、左手になぐり右手に受け、もぢつてかかれば身をかはし、撓めばひらりと乘りうつり、上になり下になり、命くらべ根くらべ、聲を力にえいえいえい、虎の怒毛怒聲、山も崩るる如くなり。和藤内も大童、虎も半分毛をむしられ、兩方共に息つかれ、石上に突つ立てば、虎も岩間に小首投げ、大息吐いたるその響、ふいごを吹くが

如くなり。母藪蔭より走り出で、「やあやあ、和藤内。神國に生まれて、神より受けたる身體髮膚、畜類に出合ひ、力だてして怪我するな。日本の地は離るとも、神はわが身にいすず川、大神宮の御祓、納受などかなからん」と、肌の守を渡さるれば、實に尤と押し頂き、虎にさし向けさしあぐれば、神國神祕のその不思議、猛りに猛る勢も、忽ち尾をふせ、耳をたれ、じりりじりりと四足を縮め、恐れわななき岩洞に隱れ入る、尾筒を摑んで跳ね返し、うち伏せうち伏せ、ひるむ所を乘つかかり、足下にしかと踏まへしは、天の斑駒、素盞嗚尊の神力、天照神の威德ぞあり難き。

國性爺合戰挿繪

かかる所に列卒の者、群がり來るその中に、大將と覺しき者大音聲、「やあやあ、うぬは何國の風來人、わが高名を妨ぐる。その虎は、忝くも主君右將軍李蹈天より、韃靼王へ獻上の爲、狩り出したる虎なるぞ。はやはや渡せ、異議に及ばば打ち殺さん」とわめきけり。李蹈天と聞くよりも、願ふところと笑壺に入り、「やあ、餓鬼も人數、しほらしいことほざいたり。身が生國は大日本、風來とは舌長し。さほどほしがる虎ならば、主君と賴む李蹈天とやら、石花菜とやら、爰につき出し詫言させい。ぢきに逢うて用もあるさもないうちは、いかな事、ならぬならぬ」と睨めつくる。

近松門左衛門

「やあ物ないはせそ討ち取れ」と一度に劍をばらりと拔く。「心得たり」と守を虎の首に懸け、母のそばに引つ据うれば、繫ぎし如くに働かず。「おお心安し」と太刀さし翳し、群がる中へ割つて入り、八方無盡に割り立て割り立て撫で捲くる。列卒の大將安大人、官人引き具し立ち歸り、「おのれ老ぼれ餘さじ」と一文字に切り懸る。なほも神明應護のしるし、神力虎に加はつて、むつくと起きて身慄ひし、敵に向ひ齒を鳴らし、猛りうなりて飛び懸る。「こはかなはじ」と安大人、列卒の者が指いたる劍、かり鉾、數鑓、手に當るを幸に、投げつけ投げつけ、打ちかかる。

虎は神力自在を得、劍を宙に引つ喰はへ引つ喰はへ、岩に打ち當て微塵になす。刃の光玉散る霰、氷を碎くに異ならず。打物盡くれば官人ども色めき立つて逃げ惑ふ。うしろより和藤內、「どつこい、遣らぬ」と現れ出で、安大人が素首を掴んでさし上げ、くるくると振り廻

はし、ゑいやつと打ち付くれば、岩に熟柿を打つ如く、五體ひしげて失せにけり。

この勢に官人原、あとへ戻れば惡虎の口、先へ行けば和藤內、仁王立ちに突つ立つたり。「ああ申し、御堪忍、御免御免」と手を合はせ、土に喰ひ付き泣き居たる。和藤內虎の背を撫で、「うぬ等が小國とて侮る日本人、虎さへ怖がる日本の手並覺えたか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍一官が忰、九州平戸に成長せし和藤內とはわが事なり。先帝の姫宮栴檀皇女にめぐり合ひ、三世の恩を報ぜん爲、父が故郷へ立ち歸り、國の亂を治むるなり。さあ命惜しくば身方に付け、否といへば虎の餌食、否や應か」と詰めかくる。「なんのいやでござりませう。韃靼王に從ふも、李蹈天に從ふも、命が惜しさ、向後お前の御家來ども、お情たのみ奉る」と、地に鼻付けて畏まる。（近松門左衛門——國性爺合戰）

近松門左衛門　淨瑠璃作者。又巢林子と號す。本名は杉森信盛。長門の人。享保九年十一月歿す。（一六五三—一七三八年）

九　成功の眞意義

世に事業をいひ成功を語るもの何ぞ多くして、その眞意義を解するもの何ぞ少きや。畢竟事業とは何ぞや、成功とは何ぞや。

人目を炫耀する事業を成就し、物質的なる實利、實績を社會に寄與することをのみ、果して事業といひ、成功といふべきか。かくの如きはむしろ事業といひ、成功といふ意義を淺薄、狹隘、貧寒、俗陋ならしむるものにあらずや。湛然深く沈潛して自家人格の根柢に培ひ、その心田、品藻を涵養する、これ亦深き貴き意義にての事業にはあらざるか、成功にはあらざるか。

綱島梁川

偉いなる事功の貴きと共に、偉いなる事功に向つて奮進、向上す

る活動そのものは、更に更に貴き事功ならずや。たとへ活動、向上が何等の較著なる效果を產せずとも、たとへ落落たる雄心、大志を抱いて空しく蓬蒿の中に埋了するが如きことありとも、誰かこれを目して全く失敗せりとはいふべき。これを失敗とするは、これ畢竟おのれが狹陋なる功利眼、實益眼を以てのみ成功の意義を解すればなり。事業といひ、成功といふ、さしも淺膚なるものならんや。余は眞理そのものを貴ぶと共に、眞理を無限に追求して已まざる研究心そのものを更に貴ぶ。眞理を贏ち得ること若し貴き事功ならば、眞理の追求に熱する心、亦これ貴き事功にあらずや。かくの如くに觀じて、事業といひ、成功といふ意義、始めて淺薄ならず。

或は又直接に利民、濟生、愛他、慈善の事に從ふを事業とし、そを成就する者を成功の人と呼ぶ。されどこれ亦ただ事功の一面の意義を揭げたるもののみ。自家の德器を成就する、これ亦事功にあらず

して何ぞ、偉いなる社會的事業にあらずして何ぞ。既に自己を完成する、これやがて社會の一點一角を完成するものにあらずや。且や德ある所その感化は孤ならず、吾が潛德の幽光おのづから能く一鄕人の心を感孚するを得んか。誰かこれを貴き事功にあらずとはいふべき。世の事業をいひ、成功をいふもの、その洞觀の眼を開いて、此の如き聲なく、臭なく、默默たる中に行はるる心靈的事業の偉大なるを看破せざるべからず。且や利他といひ、兼濟といふ、談豈容易ならんや。他を救はんとするものはまづ自ら救はざるべからず。深切なる箇人的教養の基礎を作らずして、遑遑として利他をいひ、博愛をいふ。果して能くその謂ふ所の事功の目的を達し得べきか。

世の所謂英雄、偉人のみが、果して成功の兒なるか。正直に自己の額に汗して、日常義務の高道を闊步する幾多無名の英雄、これ亦成功の兒に非ずや。英雄、偉人及びその事業にのみ感謝することを知

つて、寧ろその基礎たるべき幾多無名の英雄、無名の事功に感謝することを知らざる社會は、少恩刻薄の社會なり、自家存立の意義をだに自覺せざる社會なり。人道の爲に盡すもの、豈ただ英雄、偉人のみならんや。

吾人は世の所謂英雄、偉人たらずとも、尙その淸き心情と尊き行爲とを以て、天地の實在と連なるを得べし。而してこの一箇の自覺の上に、不動の安心を悟することを得るにあらずや。たとへ我が事業を以て社會に連なるを得ずとも、我が心情、行爲を以て天地の大系統に連なるを得るにあらずや。

この至高の一境に立たんか、世の所謂偉いなるもの、未だ必しも偉いならず。嗚呼ここに我等が解脫の道は開かれたり。ここに現實以上の廣大なる光榮の天地あり。ここにこの世の子等が解し得ざる自由あり、平安あり、慰藉あり、光明あり。

（綱島梁川―病間錄）

綱島梁川　哲學者。名は榮一郎。岡山縣の人。明治四十年十月歿す。（一八五三年―一九〇七年）

一〇　鼻長き僧

池の尾　京都府宇治郡笠取村。

むかし池の尾に禪珍內供といふ僧住みけり。眞言などよく習ひて、年久しく行ひて尊かりければ、世の人人さまざまの祈をせさせければ、身の德ゆたかにて、堂も僧坊も少しも荒れたるところなし。佛供、御燈なども絕えず、折節の僧膳、寺の講演しげく行はせければ、寺中の僧坊に隙なく僧も住み賑ひけり。浴室には湯沸かさぬ日なく、沐みののしりけり。又そのあたりには、小家ども多く出で來て里も賑ひけり。

さてこの內供は鼻長かりけり。五六寸ばかりなりければ、頤よりさがりてぞ見えける。色は赤紫にて、大柑子の膚のやうに粒立ちてふくれたり。痒がることかぎりなし。提子に湯をかへらかして、折敷を鼻さし入るばかりゑり通して、火の焰の顏に當らぬやうにして、

その折敷の穴より鼻をさしいでて、提子の湯にさし入れて、よくゆでて引き上げたれば、色は濃き紫色なり。それをそばざまに臥せ下に物をあてて人に踏ますれば、粒立ちたる穴毎に煙のやうなる物出づ。それをいたく踏めば、白き蟲の穴毎にさし出づるを、毛抜にて抜けば、四分ばかりなる白き蟲を穴毎に取り出だす、その迹は穴だにあきて見ゆ。それを又同じ湯に入れて、さらめかし沸かすに、ゆづれば鼻小さく凋みあがりて唯人の鼻のやうになりぬ。又二三日になれば、さきの如くに腫れて大きになりぬ。

かくの如くしつつ、腫れたる日數は多くありければ、もの喰ひける時は、弟子の法師に、平なる板の一尺ばかりなるが、廣さ一寸ばかりなるを鼻の下にさし入れて、對ひゐて、上ざまへもてあげさせて、もの喰ひはつるまではありけり。ことびとしてもてあげさする折は荒くもて上げければ、腹を立ててものも喰はず。さればこの法師

一人を定めて、もの喰ふたびごとにもて上げさす。それに心地惡しくて、この法師出でざりける折に、朝粥喰はむとするに、鼻をもて上ぐる人なかりければ、いかにせむなんどいふほどに、使ひける童、「よくもて上げ參らせてむ、更にその御房にはよも劣らじ」といふを、弟子の法師聞きて、「この童のかく申す」といへば、中大童子にて、みめも穢げなくありければ、うへに召し上げてありけるに、この童鼻もてあげの木をとりて、うるはしく對ひ居て、よきほどに高からず低からずもたげて、粥をすすらすれば、この内供、「いみじき上手にてありけり、例の法師にはまさりたり」と

宇治拾遺物語挿畫

て、粥をすするほどに、この童鼻をひむとてそばざまにむきて鼻をひるほどに、手ふるひて、鼻もてあげの木ゆるぎて、鼻はづれて粥のうちへふたりとうち入れつ。内供が顔にも、童の顔にも、粥とばしりてひとものかかりぬ。

内供大きに腹立ちて、頭顔にかかりたる粥を紙にてのごひつつ、「おのれはまがまがしかりける心持ちたる者かな。心なしのかたゐとはおのれがやうなる者をいふぞかし。われならぬやどつなき人の御鼻にもこそまゐれ、それにはかくやはせむずる。うたてなりける心なしのしれ者かな。おのれ立て立て」とて追ひてければ、立つままに、「世の人のかかる鼻もちたるがおはしまさばこそ、鼻もたげにもまゐらめ。をこのことのたまへる御房かな」といひければ、弟子ども物のうしろに逃げ退きてぞ笑ひける。（宇治拾遺物語）

鬼界が島　硫黄島のこと。鹿児島灣口の南西五十餘粁にあり。

二人　少將藤原成經と平判官入道康頼と。

僧都　俊寛なり。法印寛雅の子。（一八〇三年―一八三九年）

鳥羽　京都市伏見區。

六波羅　今の京都市下京區六波羅密寺及び方廣寺の邊。平氏の邸、ここにありき。

一一　有王島くだり

さる程に、鬼界が島の流人ども、二人は召し還されて都へ上りぬ。今一人残されて、うかりし島の島守となりにけるこそうたてけれ。僧都の、稚くより不便にして召し使はれける童あり。名をば有王と ぞ申しける。鬼界が島の流人ども今日既に都に入ると聞えしかば、有王鳥羽まで行き向ひて見けれども、わが主は見え給はず。「如何に」と問へば、「それは猶罪深しとて一人島に残されぬ」と聞きて、心憂しなどもおろかなり。常に六波羅邊に佇みて聞きたりけれども、いつ赦免あるべしとも聞き出ださざりければ、僧都の御女の忍びておはしける處に參りて、「この瀬にも洩れさせ給ひて御のぼりも候はず。今は如何にもしてかの島へ渡りて、御行方をも尋ね參らせばやと存じ候ふ。御文賜はりて參り候はむ」と申しければ、姫御前斜なら

薩摩潟　薩摩南方の海洋をいふ。

法勝寺　白河法皇の創建。今の京都市左京區東三條森の北、岡崎に舊址あり。

ずに悅び、やがて書きてぞ賜びてける。暇を乞ふともよも許さじとて、父にも母にも知らせず、唐船の纜は四月、五月に解くなれば、夏衣たつを遲くや思ひけむ。彌生の末に都を立ちて、多くの波路を凌ぎつつ薩摩潟へぞ下りける。薩摩よりかの島へ渡る船津にて、有王を人あやしめ、著たる物を剝ぎ取りなどしけれども、少しも後悔せず、姫御前の御文ばかりぞ、人に見せじと髻の中には隱しける。

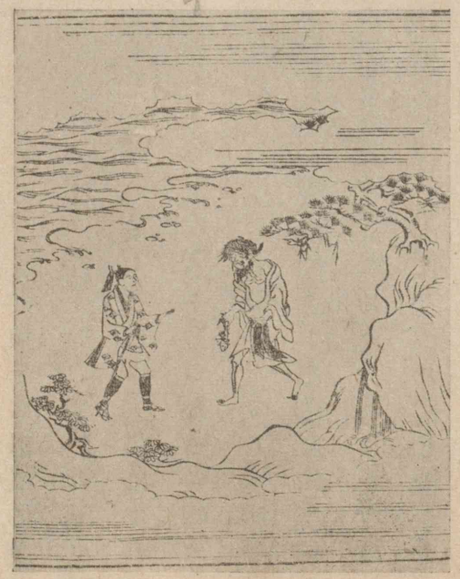
さて商人船に乘りて件の島に渡りて見るに、都にて幽かに傳へ聞きしは事の數ならず、田もなし、畑もなし、里もなし、村もなし。おのづから人はあれども、いふ詞をも聞き知らず。有王島の者に行き向ひて「物申さむ」といへば「何事」と答ふ。「これに都より流されさせ給ひたる法勝寺の執行俊寛僧都と申す人の御行末や知りたる」と問ふに、法勝寺とも執行とも知りたらばこそ返事はせめ、ただ頭を振りて「知らず」といふ。その中に或者が心得て「いさとよ。さやうの人は三

白雲迹を云云　和漢朗詠集、紀齊名、「山遠雲埋行客迹、松寒風破旅人夢」。

沙頭に云云　和漢朗詠集、大江朝綱、「沙頭刻印鷗遊處、水底摸書雁度時」。

人これにありしが、二人は召し還されて都へ上りぬ。今一人殘されて、あそこよ此處よと迷ひありきしが、その後は行方をも知らず」とぞいひける。

山の方の覺束なさに、遙かに分け入り、峯に攀ぢ谷に下れども、白雲迹をうづめて、往來の道も定かならず。晴嵐夢を破りてはその面影も見えざりけり。山にては竟に尋ねも遇はず、海の邊につきて尋ぬるに、沙頭に印を刻む鷗、沖の白洲にすだく濱千鳥の外は、迹とふものもなかりけり。或朝、磯の方より蜻蛉などの如くに痩せ衰へたる者よろぼひ出で來たる。もとは法師にてありけ

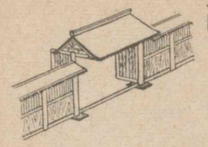


平家物語古板本挿畫

りと覺えて、髪は空樣に生ひ上り、萬の藻屑取りつけて荊棘を戴きたるが如し。繼目顯れて皮ゆたひ、身に著たるものは絹、布のわきも見えず。片手には荒海布を持ち、片手には魚を持ち、歩むやうにはしけれども、はかもゆかず、よろよろとしてぞ出で來たる。都にて多くの乞丐人は見しかども、かかる者はいまだ見ず。知らず、われ餓鬼道などへ迷ひ來たるかとぞ覺えたる。はや彼もこれも次第に歩み近づく。もしかやうの者にてもわが主の御行方や知りたると、「物申さむ」といへば、「何事」と答ふ。「これに都より流され給ひたりし法勝寺の執行俊寛僧都と申す人やまします」と問ふに、童こそ見忘れたれども、僧都はいかでか忘れ給ふべきなれば、「これこそそれよ」と宣ひもあへず、手に持てる物を投げ棄てて、砂の上にぞ倒れ伏し給ふ。さてこそわが主の御行方とは知りてけれ。

僧都やがて消え入り給ふを、有王膝の上にかき載せ奉り、「多くの

波路を凌ぎつつ、はるばるとこれまで尋ね參りたるかひも無く、如何にやがて憂きめを見せむとはせさせ給ひ候ふぞ」とさめざめとかき口説きければ、僧都少し人心地出で來、扶け起され、「誠に汝多くの波路を凌ぎつつ、遙遙とこれまで參りたるこそ神妙なれ。唯明けても暮れても都の事をのみ思ひ居たれば、戀しき者どもの面影の夢に入る折もあり、又幻に立つ時もあり、身もいたく疲れ弱りて後は、夢も現も思ひ分かず。今汝がきたれるをも唯夢とのみこそ覺ゆれ。もしこの事の夢なりせば、覺めての後は如何にせむ」。有王「これは現にて候ふなり。さてもこの御有樣にて、今まで御命の延びさせ給ひたるこそ不思議には覺え候へ」と申しければ、「いさとよ。これは去年少將や判官入道が迎の時、その瀨に身をも投ぐべかりしを、よしなき少將の『今一度都の音づれをも待てかし』など慰め置きし一言を、愚にもしやと賴みつつ永らへむとはせしかども、この島は人の



食物も絶えて無き處なれば、身に力のありし程は、山に登りて硫黄といふ物を採り、九國より通ふ商人に會ひ、食物に換へなどせしかども、日に添ひて弱り行けば、今はさやうの業もせず。かやうに日の長閑なる時は、磯に出でて網人、釣人に手をすり膝を屈めて魚を貰ひ、汐干の時は貝を拾ひ荒海布を採り、磯の苔に露の命をかけてこそ、憂きながら今日までは永らへたれ。さらでは憂き世を渡るよすがをば如何にかすべき。これにては何事も語らひ難し。いざわが家へ」と宣へば、有王あの御有様にても家を持ち給へる不思議さよと思ひ、僧都を肩に引き懸け參らせ、教に隨ひて行くほどに、松の一村ある中に、寄竹を柱とし、蘆を結びて桁梁に渡し、上にも下にも松の葉をひしと取り懸けたれど、雨風溜まるべくも見えず。有王、あなあさましもとは法勝寺の寺務職にて、八十餘箇所の庄務を司り給ひしかば、棟門、平門の内に四五百人の所從、眷屬に圍繞せられておはせし人の、まのあたりかかる憂きめに遇はせ給ふことの不思議さよとぞ思ひける。

西八條　平清盛の第。京都八條の北、坊城の西北にあり。
官人　檢非違使廳の官吏。
鞍馬　京都府愛宕郡。京都の北約十二粁にあり。

僧都こは現にてありけりと思ひ定めて、「去年少將や判官入道迎の時も、これらが文といふこともなし。今又汝が便にも、かくとはいはざりけりな」と宣へば、有王涙に咽びうつ伏して、しばしは御返事にも及ばず。稍ありて起き上り、涙を抑へて申しけるは、「君の西八條へ出でさせ給ひし後、官人參りて資財雜具を追捕し、御内の者ども搦め取り、御謀叛の次第を尋ね問ひ、皆失ひ果て候ひき。北の方は稚き人を隠しかねさせ給ひて、鞍馬の奥に忍びて御渡り候ひしにも、この童ばかりこそ時時參りて御宮仕仕り候ふなれ。いづれも御歎のおろかなる方は候はねども、中にも稚き人はあまりに戀ひ參らせ給ひて、參り候ふ度毎に、『如何に有王よ。われを鬼界が島とかやへ具して參れ』と宣ひて、むつがらせ給ひしが、過ぎ候ひし二月に、痘に

て失せさせおはしまし候ひぬ。北の方はその御歎と申し、又これの御事と申し、一方ならぬ御物思に思し召し沈ませ給ひて打ち臥させ給ひしが、去ぬる三月二日の日、遂にはかなくならせ給ひて候ひぬ。今は姫御前ばかりこそ、奈良の姨御前の御許に忍びておはしけれ。それより御文賜はりて參りて候ふ」とて取り出だして奉る。

僧都これを開きて見給へば、有王が申すに違はず書かれたり。奥には、「などや三人流されておはします人の、二人は召し還されて候ふに、何とて一人殘されて今まで御のぼりも候はぬぞ。あはれ尊きも賤しきも、女の身程いひかひなきことは候はず。男の身にても候はば、渡らせ給ふ島へも、などか尋ねまゐらで候ふべき。この童を御伴にて急ぎ上らせ給へ」とぞ書かれたる。「これ見よ、有王よ。この子が文の書きやうのはかなさよ。おのれを伴にて急ぎ上れと書きたることの恨めしさよ。俊寛が心に任せたる憂き身ならば、いかでかこの島にて三年の春秋をば送るべき。今年は十二になるとぞ覺ゆるが、これ程にはかなくては、いかで人にも見え、宮仕をもして身をも助くべき」とて泣かれけるにぞ、人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ知られけれ。

「この島へ流されて後は、暦もなければ月日の立つをも知らず、唯おのづから花の散り、葉の落つるを見ては三年の春秋を辨へ、蟬の聲麥秋を送れば夏と思ひ、雪の積るを冬と知り、白月、黑月の變り行くを見ては三十日を辨ふ。指を折りて數ふれば、今年は六つになると覺ゆる稚き者も、はや先立ちけるござんなれ。西八條へ出でし時、この子が行がむと慕ひしを、『やがて還らむずるぞ』と慰め置きしが、唯今のやうに覺ゆるぞや。それを限とだにも思はましかば、今しばらくもなどか見ざらむ。親となり、子となり、夫婦の緣を結ぶも、皆この世一つに限らぬ契ぞかし。今は姫が事ばかりこそ心苦しけれど

蟬の聲云云　和漢朗詠集、李嘉祐、「五月蟬聲送二麥秋一」。

も、それは生身なれば歎きながらも過さむずらむ。さのみ永らへて汝に憂目を見せむも、わが身ながらつれなかるべし」とて、自ら食事を止め、偏に彌陀の名號を唱へ、臨終正念をぞ祈られける。有王渡りて二十三日と申すに、僧都庵の中にて遂にをはり給ひぬ。年三十七とぞ聞えし。

有王空しき姿に取り附き奉り、天に仰ぎ地に俯し、心の行くほど泣きあきて、「やがて後世の御供仕るべう候へども、この世には姫御前ばかりこそ渡らせ給ひ候へ。後世弔ひまゐらすべき人も候はず。しばしながらへて、御菩提を弔ひ參らすべし」とて、臥處を改めず、庵を切り懸け、松の枯枝、蘆の枯葉をひしと取り懸けて、藻鹽の煙となし奉り、荼毘事終へぬれば、白骨を拾ひ、頸に懸け、又商人船のたよりにて、九國の地にぞ著きにける。（平家物語）

ゼネヴァ　瑞西の最西ゼネヴァ州の都。ゼネヴァ湖畔にあり。

湖水　ゼネヴァ湖。新月形をなし、風光絶佳なり。

一二　海南小記の序

ゼネヴァの冬は寂しかつた。岡の竝木の散り盡す頃から、霧ともうす雲とも分らぬものが、明けても暮れても空を蔽ひ、時としては園の梢を隱した。月夜などは忘れてしまふやうであつた。木枯も時雨もこの國には無かつたが、四五日に一度づつ、しめつた風が湖水を越えて西北から吹いて來て、その度ごとに冬を深くした。寒さの頂上といふ頃には、或朝は木花（こばな）が咲く。その時ばかりは霧がすこしうすれて山の眞白な雪が見え、日影がさして鳥の姿などが目に映じた。

遠い東南の虹あざやかなる海の島と、島で行き遇うた色色の人と、その折の僅かな旅の日記とを、それからそれへと思ひ出すのは、かういふ日の午後の散歩の時であつた。自分以外に、ただ一人だけ

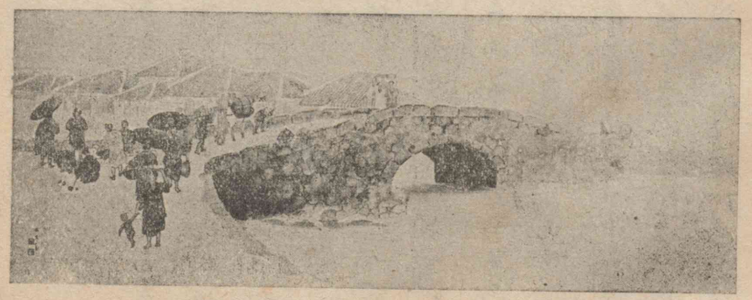
チェンバレン　言語學者。英國ハンプシャーの人。東京帝國大學教授たること數年、解職後文科大學名譽教授に列せらる。和歌論その他著書多し。（西暦一八五〇年―一九三四年）

ルソー　佛國の哲學者、文學者。民約論、エミール等の著あり。（西暦一七一二年―一七七八年）

ラフカディオ・ヘルン　英國人。我が國に歸化して小泉八雲と稱す。東京帝國大學に教授す。明治三十七年九月歿す。（一八五一〇年―二五六四年）

沖縄といふ島を知つて居る人が、同じこの町の、しかも同じ丘に、僅か五六町を隔てて住んで居るのだが、それを知りながらも、訪ねて話をすることの出來ぬのが、特に堪へがたい旅人の無聊であつた。

この人は日本では誰知らぬ者も無いチェンバレン教授である。どうした心持からか、ゼネヴァに來て、人に忘れられつつ靜かに老いんとして居る。家はルソー舊居の近くに在つて、番地までも自分は知つて居た。先生はたしかラフカディオ・ヘルンと同じ年であつた筈だから、今では八十も過ぎたかと思はれるが、ひどく眼が惡くて、その眼は腦から來てゐる



琉球風俗（松村梅叟筆）

といふことであつた。強ひて面會を求める手紙を出した者もあつたが、病氣に障るからといふ代筆の斷が來たさうだ。秋の初めのまだ暖かい頃までは、それでも樹蔭や水の滸を看護人に伴はれて逍遙して居られるのを見かけたといふ人も幾人かあつた。そんなら自分もよそながら一度はと思つて、折折靜かな午後などに往つて見たこともあつたが、終に目的を達しなかつた。

或日一人の我が留學生が、古本屋で先生舊藏の若干の和書を買ひ入れた。これを聞いて自分たちも往つて見たが、もう大部分は賣れてしまつて、一冊の日本國語文典だけが殘つて居た。有名な先生の自著であつて、しかも澤山の書入があるのは、疑も無く再版の準備であつた。同行の一人が心を動かして、値段に構はず購つて還つたから、この本ばかりは久しぶりに再び日本の日の光を見たのである。

日本とこの學者との因緣は竝竝でなかつた。日本に生まれて一生涯勉强したものにも、先生だけの蒐集と述作とを遺し得た者は多くなかつた。我我が今頃少しづつ必要を唱へて居る土俗誌の研究に、先生は遠國から來て三十年前に手を著けた。アイヌ民族の言語に就いても大いなる感謝は先生に屬する。殊に琉球に至つては、その母方の祖父船長ベシル・ホールの曾て訪ひ寄つて、なつかしい見聞錄を世に留めた島である。その孫に取つては家の學であり、由緒ある研究であつた。定めて人知れぬ愛著を以て學問の成長を希うて居たことと思ふのに、あの後、先生の迹を踏んでこれを敷衍しようとした者が無いばかりか、不本意なる若干の小誤謬までが今にその儘にして棄ててあつて、本だけが所謂珍本となつて、讀みもせぬ人の本箱の底に追追と隱れて行く。先生の今の境遇を知る者には、これはいひやうも無い寂しさである。

「運命はかくの如く、時としては人間の書齋までを支配する。古代の海洋民族の大移動を記念すべき有形、無形の不思議な遺物、かれ等に拮抗して今なほいささかも衰へざる自然力、兩者の妥協を意味する文明の變化、就中血と言語との止む能はざる混淆が、いちじるしい影響を與へた部曲組織、宗教觀念、乃至は藝術樣式の島島の特色が、從來曾て見ない强烈なる興味を諸國の學界に喚び起して、次第に大規模の討査と比較研究とを開始するやうになつたのは、恰もこの疲れたる老學者がその生涯の學業を切り上げた際であつた。これから大いに興らうとする新機運に向つては、先生はただ一箇有益なる資料を殘したるにとどまり、その計畫と希望とにはもう參加することが出來ないのである。

況やこの北太平洋の一角に於いて、漸く今始まつたばかりの若若しい運動、卽ち島に生まれた者みづからが、島と島との生活の連

おもろさうし　沖繩の古歌謠を集めたるもの。

伊波普猷　沖繩の人。民俗學者。東京帝國大學言語學科選科出身。

鎖を昔に溯つて考へて見ようとする學問の如きは、假令それが先生の深く愛した日本であり、且先生の感化が暗暗裏に働いて居たことは確かであつても、その悅を我我と分つことが、もはや出來ないまでに、先生は弱つてしまはれた。

以前先生が名を聞きながら手を著ける機を得なかつた「おもろさうし」は、伊波普猷君などの辛苦に由つて今現代に蘇らうとして居る。これを沖繩一島の寶と羨むにとどまらず、かくの如き信仰歸依、かくの如き情緒を、島に家する者の祖先の心裏に漲り溢れしむるに至つた最初の力が、ひとり血を共にする大八洲の國國のみならず、同じ大海の潮にはぐくまれて、北と南とに吹き分けられた遠い沖の小島の荒夷の胸にも、なほ一樣に感ぜられて居たのではないか。

これを推究してもらひたいのが引きつづいての我我の願であ

るが、久しい孤立に馴らされて、ちひさな陸地を國と名づけ、渚から外をよそと考へた人人の離ればなれの生涯の勞作が、果していつの世になつたら融け合うて、一箇の完成と爲るであらうか。かういふ外國の學者の老境を眺めるにつけても、散漫なる今までの物好きの罪深さを感ぜざるを得ないのである。

チェンバレン

海南小記の如きは、至つて小さな詠歎の記錄に過ぎない。もしその中に少しの學問があるとすれば、それは幸にして世を同じうする島島の篤學者の暗示と感化とに出でたものばかりである。南島研究の新しい機運が、一箇旅人の筆を役して表現したものに外ならぬ。

ただ自分は旅人であつた故に、常に一箇の島の立場からはこの

群島の生活を觀なかつた。僅かの世紀の間に作り上げた歴史的差別を標準とすること無く、南日本の大小遠近の島島に普遍して居る生活の理法を尋ねて見ようとした。さうして又將來の優れた學者たちが必ずこの心持を以て、人間の無用なる鬪諍を悔い歎き、必ずこの道を歩んで、次第に人種平等の光明世界に入らうとするだらうと信じて居る。然らば事業は微小ではあつても、やがて咲き匂ふべきものの蕾である、歌ひ舞ふべきものの卵である。

乃ち新しい民族學の南無菩提のために、謹んでこの書を以て、日本の久しい友ベシル・ホール・チェンバレン先生の生御魂に供養し奉る。（柳田國男―海南小記）

柳田國男　民俗學者。東京帝國大學法科出身。元貴族院書記官長。明治六年姫路に生まる。

一三　フランスの藝術

人間の集合生活が作り出だす歴史の相は、各時代が要求した藝術に具體的の表現を示して、その中に永遠化せられ、累積せられて果てしなく續いて行く。大海の水が、その流動の勢を強く表示せんとする要求に捉へらるる時、涌き立つ波となつて立ち昂る如く、各時代の生活者がその時代の生氣を最も力強く、最も自然な姿に於いて示さんとする表現慾に捉へらるる時、藝術の波は油然として涌きあがつて來る。その表現の迹の最も顯著であつて、一見して明瞭にその時代の人生が求めた表現の形式を、藝術の波浪の姿を掴み得るものは、特に成形の藝術であり、更に建築である。

巴里の美の一半は、この累代の生きた歴史の波浪が打ち寄せたままに凝化せられ、純化せられた集積にある。人はその時代の藝術

の波層が限なく續く中を歩いて、科學者が地皮の斷層面より地球の歴史を讀む如く、現在までも生きて動く人間の中心要求の歴史を讀むのである。神祕と熱意とに燃えてゐた中世紀のゴシックの會堂から、理智と統一とに綜合の姿を求めたクラシック時代の宮殿から、自然と箇人權とに熱狂した革命期ロマンチックの彫像から、民衆の力が次第に強くなるにつれて、學校や普通の住宅を中心として來た近代の建築物から、更に一方に世紀末の痛苦を示すと同時に、他方には自然の力に甦り、大地の生氣を呼吸する人間の靈の態度を示す現代人の彫刻から、我我は各時代が示す表現相の奏し出だす合唱曲を不知不識の間に感受せずにはゐられない。

巴里は藝術の都であり、生きた歴史の都であり、過去が現在の中に生き、現在が刻刻に從來の藝術の波層の上に、更に新しき波層を刻みつつ行く都である。時の歩がいかに藝術に飜譯せられ、具體化

セエヌ河　佛國ランクル平原に發し、セエヌ州内を西北流して英吉利海峽に注ぐ。

せられつつあるかを意識せずにはゐられない都である。巴里に於いては、總べての人が藝術家たらずにはゐられない。此處では時の歩と共に、環境と共に、大氣と共に、人人が自由の正眞の中心表白がなし得られる。巴里全體が巨きな彫像の群立であり、その群像のなせる綜合の音樂が大氣をゆるやかに搖り動かしてゐる。

セエヌの流が、マロニエの若葉が、更にその流の末を照らしてゐる落日が、その後ろの半天を染める牡丹色の後光が、人間の藝術と調和し、協力して全體の仕上をなしてゐる。恐らく自然もこの藝術の都、表現力の盛な、然し靜穩な都會に對しては、決して他の場處で示すやうな暴力を振ふことは出來まい。時あつて岸を嚙

ロダン作

タブロオ繪額。

ロー畢

んで溢れ出づるセエヌの洪水も、直ちに藝術の捕虜にせられ、タブロオの中に收められ、建築物に記念の波痕を殘して行く。

されば大革命の如き騷亂時代、千七百九十三年の所謂恐怖の年に於いてすら、あらゆる畫家、彫刻家は、革命の藝術的表現時代の涌きあがり盛りあがつた姿の具體化を求め、又中央美術館の施設をなし、千七百九十六年には、佛蘭西全國の各都市に繪畫、彫刻、建築の學校を設けて、一般人の自由なる表現を易からしむる途を講じた。

吉江喬松　佛文學者。文學博士。早稻田大學文學部長。嘗て孤雁と號した。長野縣鹽尻の人。明治十三年九月生まる。

藝術を消閑の具と考へ、高尚なる娯樂と思ひ、文藝を弱者の遊戯虛飾と思ふが如き空氣の中に育てらるる國民が、世界の何處にでも今日なほ存するならば、氣の毒である。少くも一國の少數者のみがその國の藝術を專有し、大多數はそれに目を向けることすら許されない國があるならば、これくらゐ不合理なことはない。更に藝術の創造力が一國の一小部分にのみ動いてゐて、その國の生活者の大部分が自己の表現慾に對して全く痲痺してゐるならば、その國の文化は病的であり、半死狀態である。かやうな國に於いて若し藝術的作品がなされたとしても、それは摸造か移植かに終る。なぜならば、その國自身の生きた生命の血は動き流れてゐないが故に、一小部分に咲き出た藝術の花は、不斷の精氣を大地の中より攝取し、大地そのものの元氣の不斷の發露の口となることが出來得ないからである。（吉江喬松――フランス文藝印象記）

荒木田守武
伊勢山田の神官。天文十八年八月歿す。（一二三三年—一二一〇九年）

山崎宗鑑
名は範重、通稱彌三郎。近江の人。天文二十二年歿す。（一二一五年—一二二一三年）

猿の尻木がらししらぬもみぢ哉　宗鑑

松永貞德
久秀の孫。俳諧の宗匠として、花の本の號を賜はる。承應二年十一月歿す。（一二三一年—一二三一三年）

安原貞室
名は正章、通稱鑑屋彦左衛門。京都の人。延寶元年二月歿す。

一四　元朝

荒木田守武

○元朝や神代のこともおもはるる

山崎宗鑑

○手をついて歌申しあぐる蛙かな

山崎宗鑑筆

松永貞德

○雪月花一度に見するうつ木かな

安原貞室

○これはこれはとばかり花のよし野山

（一二七〇年—一二三三年）

北村季吟
國學者。通稱久助、拾穗軒、又湖月亭と號す。近江の人。寶永二年六月歿す。（一二八四年—一二三六五年）

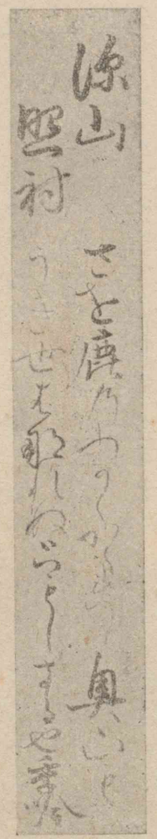
深山照射
さた鹿のふかくかくれし奥山もうき世はなれぬともしする也　季吟

池西言水
南部の人。享保四年歿す。（一二三〇八年—一二三七九年）

西山宗因
名は豐一、通稱二郎。肥後の人。檀林派の祖。天和二年三月歿す。（一二六五年—一二三四二年）

北村季吟

○一僕とぼくぼくあるく花見かな


北村季吟筆

池西言水

○木がらしのはてはありけり海の音

西山宗因

○白つゆや無分別なるおきどころ
やがて見よ棒くらはせむ蕎麥の花

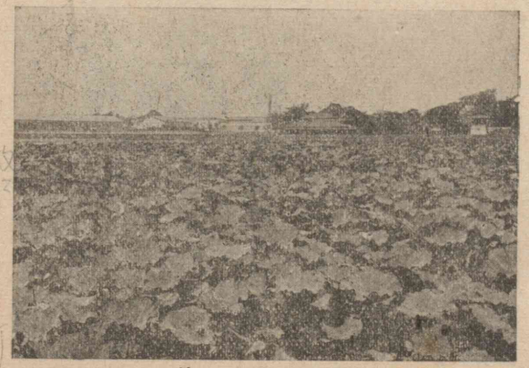
西山宗因筆

戸さしぜぬ世
とや水鶏の音
もなし　宗因

一五　擬古文四篇

一、蓮池の花

大よそ人の世の中、おのがじしのなりはひ暇なきものから、猶そのいとまには何くれの心やりぐさのなくてやはあらむ。さるは繪かき手習ふわざを始にて、小琴をあそび、圍碁にともなふたぐひをこそ古人も心ゆくものにはいひおきつれ。しかはあれど、おのがをぢなき心に思ひたゆめられて、さるたぐひの事はおのづからに物うく、ただ暇あるをりをりは世ばなれたる境に心をよする癖なむ絶えざりける。かれ幼くて市の

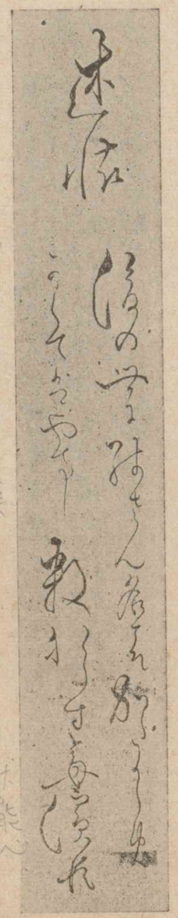


不忍池

上野の岡
東京市下谷區。
萱の町
今の下谷區茅町。

述懐
後の世に殘さん名こそかたからめかくてはやまじ數ならずとも
濱臣

中に生ひ立ちしほどより、いかで塵ひぢのあと絶えたるすまひせばやと思ひわたれど、さるよすがもあらで春秋を送り迎へぬるに、四十とせといふ齢にまだ二つばかり足らぬ程にやありけむ、よしありてこの上野の岡のかたへなる萱の町といふ處に住み移りぬ。處のさまおのづから山里びて、茅が軒、蓬の門、すべてひたたけたるあたりとはやう變りて、心ゆく方ぞ多かる。山のたたずまひ水のあり樣、春秋につけつつあはれ絶えせぬが中に、わきて蓮花さく頃こそよなく見どころは多かれ。波清き池の心いと廣らかに、花に葉にいづこをはかともなく、目ぢのかぎりにほひみち、あしたには露ながらゑまひ開けて、さし昇る日影を待ちとり、夕べには雨の名殘



清水濱臣筆

花物いはまほし　和漢朗詠集、菅三品、「誰謂花不レ語、輕塵激兮影動レ唇」。

清水濱臣　國學者。通稱玄長。江戸の人。村田春海の門人。文政七年歿す。（一四三六年—一四八四年）

隅田川　荒川の下流。東京市の東部を貫きて東京灣に入る。

石濱　東京市淺草區。待乳山、今戸、橋場一帶の總名。

しづまりて、暮るる波間にねぶれるなど、花物いはまほしげなりといへるからうたの心ばへさへ思ひ出でられて、この世の物としも覺えずなむ。かかる眺に朝夕なづさひては、いとどかの市のちまたの厭はしさもおぼえで、かく處得たるすみかの世に幸あることをぞ喜ぶなる。さるは、

塵の世はよそにぞ住まむ池水の
にごりにそまぬ花になれつつ　（清水濱臣—泊洒文藻）

二、石濱の雨

葉月二十日あまり、秋のけはひの懷かしくて、例の隅田川のほとり、石濱の庵にゆきて宿りぬ。有明の月のにほひも、霧たちわたる曉のさまも、處がら世に似ぬものから、此處は雨のそぼふる日なむ殊にあはれは深かりける。もとより萱葺ける庵なれば、音だになくて、軒の雫の三つ四つ落ちそむるより、籬の萩の下葉の色づきたるが、

秩父の山　埼玉縣秩父郡の山山。

加藤千蔭

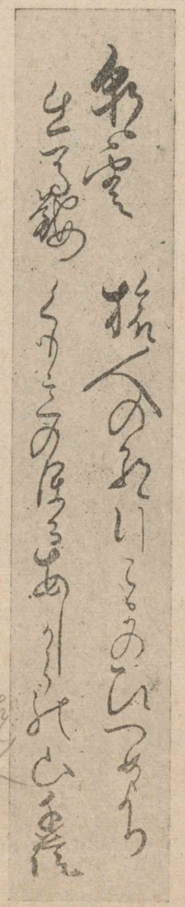
ほろほろと散るもあはれなり。水の面は動くともなくて鏡の如くなるに、雲の濃き薄きうつろひて、かつ浮びかつ消ゆる水沫にこそ、雨のけはひはしるかりけれ。みをの一筋はさしひく汐にもまじらで、とはに縹の色に流れいにて沖に出づめり。これや水上の秩父の山の眞清水の落ちくるならむ。打ち向ふ岸の榛原のみ濃き墨がきの如くなるが中に、柞の黄ばみたるは、流石にほのかに見えて、そのひまひまより長き堤の見えわたるに、堤のをちなる梢はやうやうに薄墨もてかき消ちたらむ如く、いとしも遙けきは唯なびかぬ煙とのみぞ見ゆる。此處彼處より鳥の飛びゆきつつ、塒の鷺の翼おもげに起きいでて、川の瀨の眞菰におり立てば、みさごの群れきて水の面に浮べるもをかし。上つ瀨より、筏師の蓑笠きて、棹を

筑波嶺　茨城縣筑波郡。

朝霧川馬鞍　旅人の朝行こまのひづめよりくも立のぼるあしがらの山　千蔭

水分の神　水神祠、隅田川の東岸にあり。

筏の上に横たへ、おのれたむだきて思ふこともなげにて居り。筏は水のまにまに流れゆくも靜けし。渡守舟さし出だせば、大笠傾けて渡りゆく人のやがて堤をありくさま、繪によく似たり。すべて一日の中に、筑波嶺より吹きおろすかと思へば、沖よりも風かよひ來て、岸の木立も、長き堤も、あるは現れ、あるは隱れて、限なき青海原に向ひたらむやうに覺ゆる折もありけり。かくてやや夕暮近くなりゆけば、群鳥のおのがじし塒求むるに、雁の一つら二つら渡りゆくなど、えもいはむ方なし。暮れはててても、なほ逝く水の色のみ遠じろく殘りて、川添小田にいはへる水分の神の御燈の、海士の漁火ともいふべく、かすかに見え渡るもあはれなり。



加藤千蔭筆

加藤千蔭　江戸の歌人。眞淵の門人。通稱又左衛門、芳宜園と號す。枝直の子。又狂歌を好みて橘八衢と稱す。文化五年九月歿す。（一七三九年―一八四六年）

秋ふけて小さめ
そぼふる隅田川
たが墨がきの
すさびなる
らむ

（加藤千蔭―うけらが花）

三、雪中眺望

をりかこふ柴の籬も、山となりて鄰をへだて、竹の下道あと絶えて訪ふ人もなし。「あなさぶしや」といふほどに、「世にうもるるわび住の心やりには酒こそよけれ」と妹なねが榾さしくべ、「瓶のしり焚きくろめて勸むるに、軒はくもれど心はすこし晴れぬ。醉ふとはなしにうかれ出でて、駒にはひ乘るに、かき掃はぬ蓬が庭も玉敷きわたし、枯れたる木どもも花咲

石　瀆（葛飾北齋畫）

はしり出の堤　幸手堤。作者守部は當時武藏國幸手驛に住みき。

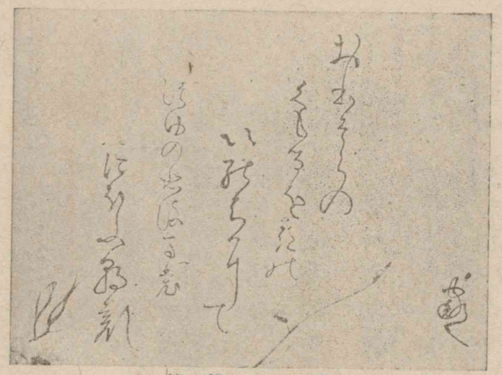
新田　群馬縣新田郡の山山。

守部　おほそらのくもるを花のいのちにてつゆのひるまもにほふ朝顏

なにがしの嶽　淺間山をさす。

心だかくも　新古今集、慈圓、「世の中を心高くもいとふかな富士の煙を身のおもひにて」。名だたる高嶺　富士山をさす。

きぬれば、野邊のあたりやいかならむと、鞭打つ駒のゆきのまにまに、はしり出の堤にのぼりて見さくるに、天地のそくへのきはみ眞白にて、ただ刀根の川浪一すぢ黑くぞ流れたる。



橋守部筆

野も山も雪に隈なく近よりて見えて、刀根の流のかぎりをぞ見る。

水上の新田秩父五百重山千重たたなづく群山を、何の山くれの山と數へもて、ゆくに、遙けき峯より（け）近く煙のたち上るもめづらしや。ひとり思ひあがりて、なずらふべき山のなきにぞなにがしの嶽とは知らるる。「心だかくも」とこそはいはまほしけれ。名だたる高嶺は時じくものから、繼ぎて降りしく大雪に、この出で立てる見わたしより、武藏野の大野のきはみ遠じろく麓につづきて、天にはばかる大傘をなかば開きたるさまにさし出でたるが、なほ珍しくて、うつらうつら見つつしをれば駒の口はおさへとどめながら、心は空になむ行きける。

降る雪に片びらきなる大がさを
　　さしてたたせる富士のしらやま

などひとりごちたる程に、一杯の酒も醒めてすずろ寒くなりぬれば、駒ひき向けて歸りなむとす。（橋守部――守部家集）

橋守部　國學者。伊勢の人。江戸に住す。嘉永二年五月歿す。（一四四一年―一二五〇九年）

四、漁村

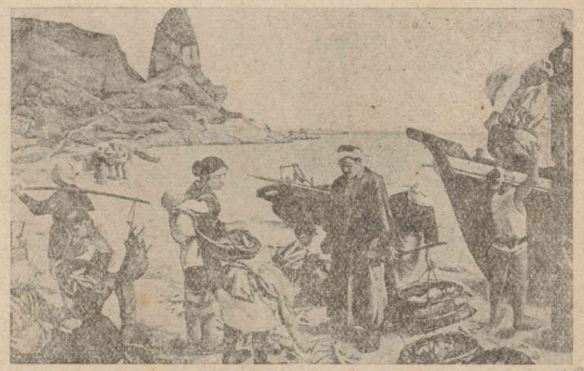
あまの住家ばかりあはれなるものはなし。いと便りなき海邊の風もたまらぬ松蔭などに、ただかりそめに造りたる藁屋どもの樣、波打ち寄せなばやがて流れも失せぬべう、いとはかなげに見ゆるを繪にかきすさびたるなどは、なかなかにをかしきものから、さて

住まひなば何ごこちかせましと思ひやるだに心細し。

夕つ方など、年老いたるをのこの手がらみしたるが磯邊に立ちて、「今日はいと遲くもあるかな」などいひつつ、沖の方をまもりをり。孫どもにやあらむ、眞砂の上をはしりありきつつ遊びゐたるに、入日さしたる島蔭より三つ二つ歸りくる舟の、槌ひきをりてほこらしげなるを、老人待ちえ顏にうちほほ笑みたるは、さち多かりしにやと見ゆ。

渚によせて飛びおるるままに、網繰りかけなど、とかくしつつのしるに、男も女もあまた出で來て、大きなる籠に魚ども取り入れつつ荷ひもて行くさま、さはいへど賑ははしげなり。くぐつめく物もて來て、小さき魚三つ四つ乞ひもてゆく童などもあり。すべて人多く立ちこみ騷ぎて、舟のあたりかしましく、さしよりて覗くべうもあらず。

中島廣足
國學者。熊本の藩士。田翁また櫪園と號す。元治元年歿す。（一四五二年―一二五二四年）



濱（大久保作次郎筆）

いと長き網の渚に懸け干したるを繰りためて取り入れなど、やうやう靜まりゆけば、こなたかなた火ともしたる透影さへもあらはにて、いとあはれに見ゆ。

一夜宿りて見れば、浪風のひびき枕をゆすりて、つゆまどろまれず。あかつきがた鄰の家家目さまして、なりはひのことどもなるべし、あやしう聞き知らぬ事どもを、おのがじし、聲高にいひかはしたる、げにあまのさへづりめづらしうもをかしうも。

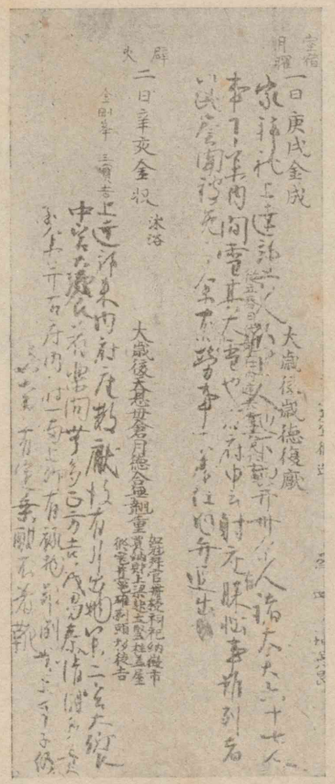
（中島廣足―櫪園文集）

一六　法成寺

今は御心地例ざまになりはてさせ給ひぬれば、御堂の事思し急がせ給ふ。攝政殿、國國まで、さるべき公事をばさるものにて、まづこの御堂のことを先に仕うまつるべき仰言のたまふ。殿の御前も、この度生きたるはことごとならず、この願の協ふべきなめり」とのたまはせて、他事なくただ御堂におはします。

攝政殿　藤原頼通。道長の長子。世に宇治關白と稱す。承保元年二月薨ず。（一六五二年―一七三四年）

殿の御前　藤原道長。



藤原道長筆

方四町をこめて、大垣にして瓦葺きたり。さまざまに思しおきて急がせ給へば、夜の明くるも心もとなく、日の暮るるも口惜しうおぼされて、夜もすがらは、山を疊むべきやう、池を掘るべきさま、木を栽ゑなめさせ、さるべき御堂御堂、方方さまざま造りつづけ給へり。御佛はなべての様にやはおはします。丈六の金色の佛を數も知らず造りなめ、そなたをば北南と馬道をあけて、道をととのへ造らせ給ひて、廊、渡殿かず多く造らせ給ふ。雞の鳴くも久しくおぼされ、宵曉の御行もおこたらず、やすきいも大殿ごもらず、ただこの御堂のことのみ深く御心にしませ給へり。

法成寺建築の古畫

日日に多くの宮達、大臣、上達部、さるべき人人參りまかんで立ち

こむ。さるべき殿ばらをはじめ奉りて、宮宮の御封、御庄どもより、一日に五六百人、千人の夫どもを奉るも、人の數多かることをばかしこきことに思したち、國國の守ども、地子、官物はおそなはれども、只今はこの御堂の夫役、材木、檜皮、瓦など多く參らするわざを、我も我もと競ひ仕うまつる。

大方近きも遠きも參りこみて、品品、方方、あたりあたりに仕うまつる。或所を見れば、御佛つかうまつるとて、佛師ども百人ばかり竝み居て仕うまつる。同じくはこれこそめでたけれと見ゆ。御堂の上を見上ぐれば、工匠ども二三百人のぼり居て、大きなる木どもには、太き綱をつけて聲を合はせて、えさまさと引き上げさわぐ。御堂の内を見れば、佛の御座造りかがやかす。板敷を見れば、木賊、椋の葉などして、四五十人手ごとに竝み居て磨き拭ふ。檜皮葺、壁塗、瓦作なども數をつくしたり。又老いたる翁などの、三尺ばかりの石を心に任せて切りととのふるもあり。池を掘るとて四五百人おりたち、山を疊むとて五六百人のぼり立ち、又大路の方を見れば、力車にえもいはぬ大木どもに綱をつけて、叫びののしり引きもてのぼるあり。鴨河の方を見れば、筏といふものに榑材木を入れて、棹さして心地よげに歌ひののしりてもてのぼるめり。大津、梅津の心地するも、西は東といふことはこれなりけりと見ゆ。磐石といふばかりの石を、はかなき筏にのせて率て來たれど沈まず。すべていろいろさまざまいひつくし、まねびやるべき方なし。かの須達長者の祇園精舍造りけむもかくやありけむと見ゆるを、冬の室、夏の風、おのおのことごとなり。

かかる御勢にそへて、入道せさせ給ひて後はいとど勝らせ給へりと見えさせ給ふにも、尚なべてならざりける御有樣かなと、近う見奉る人はたふとみ、遠う見奉る人は遙かに拜み參らす。今はこの

大津　滋賀縣大津市。
梅津　今は京都市右京區。
須達長者　釋迦在世當時の舍衛國の富者。波斯匿王の大臣。
祇園精舍　印度の寺の名。釋迦説法の道場。

御堂のあたりの木草ともならむと思へる人のみ多かり。そなたざまに赴けば、海の浪も柔かに立ちて、この御堂の物をもて運ばせ、河の水澄みて快く浮べもて參ると見ゆ。

なほなべてこの世の事とは見えさせ給はず。まづは先年に長谷寺にある僧の御祈をいみじうして寢たりける夢に、いかめしき男の出で來て、「何か、かく殿の御事をばともかくも申し給ふ。弘法大師の佛法興隆のために生まれ給へるなり」とぞ見えさせ給ひける。又天王寺の聖德太子の御日記には、「これより東に佛法弘めむ人を我と知れ」とこそは書き置かせ給ふなれ。いづれにてもおろかならぬ御事なり。（榮華物語）

長谷寺　奈良縣磯城郡初瀬町にある眞言宗の大寺。

天王寺　四天王寺の略。大阪市にあり。

法皇　後白河法皇。

建禮門院　平德子。高倉天皇の皇后、安德天皇の御生母。平清盛の女。（一八一七年―一八七三年）

北祭　賀茂祭をいふ。石清水八幡の南祭に對す。

清原深養父　歌人。醍醐帝の朝に仕ふ。

補陀落寺　京都府愛宕郡靜原の山麓にあり。

小野の皇太皇后　後冷泉天皇の皇后藤原歡子。その舊迹は同郡高野附近なりといふ。

一七　大原御幸

法皇は、文治二年の春の頃、建禮門院の大原の御すまひ御覽ぜまほしく思し召されけれども、二月、三月の程は嵐烈しく、餘寒もいまだ盡きず、峯の白雪消えやらで、谷のつららも打ち解けず。かくて春過ぎ夏立ちて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて大原の奥へ御幸なる。忍の御幸なりけれども、供奉の人人には德大寺、花山院、土御門以下、公卿六人、殿上人八人、北面少少候ひけり。鞍馬通りの御幸なりければ、かの清原の深養父が補陀落寺、小野の皇太皇后の舊迹叡覽ありて、それより御輿にぞ召されける。遠山にかかれる白雲は、散りにし花のかたみなり。青葉に

見ゆる梢には、春の名残ぞ惜しまるる。頃は卯月二十日餘りのことなれば、夏草の茂みが木をわけ入らせ給ふに、始めての御幸なれば、御覽じなれたる方もなく、人迹絶えたるほども思し召し知られてあはれなり。

西の山の麓に一宇の御堂あり、卽ち寂光院これなり。舊う造りなせる泉水、木立よしあるさまの處なり。甍破れては霧不斷の香を燒き、扉落ちては月常住の燭を挑ぐ」とは、かやうの處をや申すべき。庭の若草茂りあひ、青柳絲を亂りつつ、池の浮草波に漂ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松にかかれる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉まじりの遲櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲き亂れ、八重立つ雲の絶間より、山時鳥の一聲も、君の御幸を待ち顏なり。法皇これを叡覽ありて、かうぞあそばされける。

池水にみぎはの櫻散りしきて

寂光院　大原にあり。天台宗の尼院。甍破れては云云　出典未詳。

青葉まじり云云　金葉集、藤原盛房「夏山の青葉まじりの遲櫻初花よりも珍しきかな」。

波の花こそさかりなりけれ

古りにける岩の絶間より落ちくる水の音さへ、古びよしある處なり。綠蘿の垣、翠黛の山、繪に書くとも筆も及び難し。

さて女院の御庵室を叡覽あるに、軒には蔦、朝顏這ひかかり、しのぶまじりのわすれ草「瓢簞屢空し、草顏淵が巷に滋く、藜藿深く鎖せり、雨原憲が樞を濕す」ともいひつべし。板の葺目もまばらにて、時雨も、霜も、おく露も、洩る月影に爭ひて、たまるべしとも見えざりけり。うしろは山、前は野べ、いささ小笹に風さわぎ、世に立たぬ身の習として、憂き節しげき竹柱、都の方の音づれは、間遠に結へるませ垣や、わづかに言問ふものとては、峯に木づたふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、これらが音づれならでは、正木のかづら、靑つづら、くる人稀なる處なり。

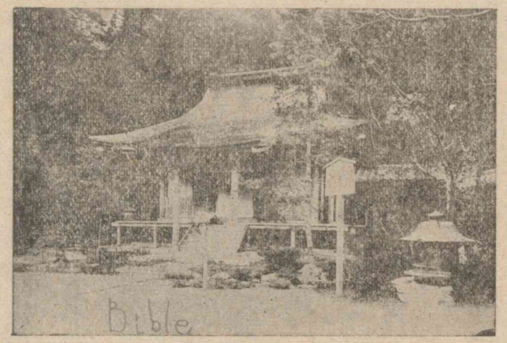
法皇「人やある、人やある」と召されけれども、御いらへ申すものも

瓢簞屢空し云云　橘直幹が申文中の語。

顏淵　名は回、字は子淵。孔門十哲の首。

原憲　字は子思。孔子の門人。孔子の卒後、草澤の中に隱る。

なし。稍ありて老い衰へたる尼一人まゐりたり。「女院はいづくへ御幸なりぬるぞ」と仰せければ、「この上の山へ花つみに入らせ給ひて候ふ」と申す。「さこそ世をいとふ御習といひながら、さやうの事に仕へ奉る人もなきにや。御いたはしうこそ」と仰せければ、この尼申しけるは、「五戒、十善の御果報盡きさせ給ふによりて、今かかる御目を御覽ぜられ候ふにこそ。捨身の行に、なじかは御身を惜しませ給ひ候ふべき。因果經には、『欲知過去因、見其現在果。欲知未來果、見其現在因』と說かれたり。過去、未來の因果をかねて悟らせ給ひなば、つやつや御歎あるべからず」とぞ申しける。この尼の有樣を御覽ずれば、身には絹、布のわきも見えぬもの



寂光院

五戒　偸盜戒、邪淫戒、妄語戒、殺生戒、飲酒戒。

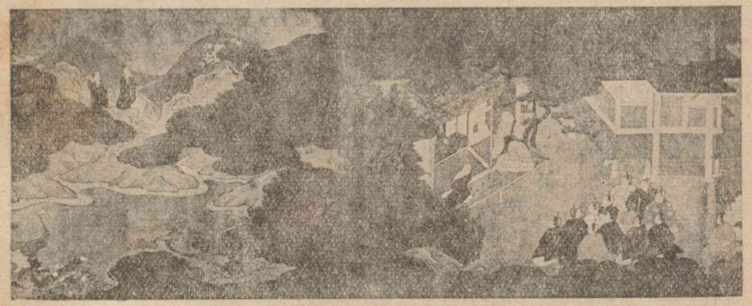
十善　不殺生、不偸盜、不邪淫、不妄語、不綺語、不惡口、不兩舌、不貪欲、不瞋恚、不邪見。

因果經　四卷。劉宋の求那跋陀羅の譯。因果應報の例を擧げて敎訓したるもの。

を結び集めてぞ著たりける。あの有樣にてもかやうの事申す不思議さよと思し召して、「抑、汝は如何なるものぞ」と仰せければ、この尼さめざめと泣いて、しばしは御返事にも及ばず。稍ありて涙を抑へて、「申すにつけて憚り覺え候へども、故少納言入道信西が女、阿波內侍と申すものにて候ふなり。母は紀伊二位、さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬるほど思ひ知られて、今更せむ方なうこそ候へ」とて、袖を顏に押しあてて忍びあへぬ樣、目も當てられず。法皇「げにも汝は阿波內侍にてあるござんなれ。御覽じ忘

信西　藤原通憲。實兼の子。鳥羽天皇以下四朝に歷仕す。平治の亂に信賴、義朝に殺さる。（一一八一九年）

紀伊二位　名は朝子。



大原御幸（大原御幸繪卷）

れさせ給ふぞかし。何事につけても、唯夢とのみこそ思し召せ」とて、御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿、殿上人も、不思議のこと申す尼かなと思ひたれば、ことわりにて申しけりとぞ各、感じあはれける。

さてかなたこなたを叡覽あるに、庭の千草露おもく籬に倒れかかりつつ、外面の小田も水越えて、鷸たつ隙も見えわかず。女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子を引きあけて叡覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲をかけられたり。左に普賢の畫像、右に善導和尚、並に先帝の御影をかけ、八軸の妙文、九帖の御書も置かれたり。蘭麝の匂にひきかへて、香の煙ぞ立ちのぼる。障子には、諸經の要文ども、色紙に書いて所所におされたり。その中に大江の定基法師が清涼山にして詠じたりけむ「笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前」とも書かれたり。少しひきのけて女院の御歌

善導和尚　唐の名僧。淨土の教義を鼓吹せし人。（西暦六一三年—六八一年）

先帝　安德天皇。

八軸の妙文　法華經なり。八卷ある故にいふ。

九帖の御書　善導の觀無量壽經の疏なり。九卷ある故にいふ。

大江定基法師　齊光の子。文章に能くす。參河守に任ぜらる。後僧となり寂昭と號す。入宋して、長元九年宋に寂す。（一六二四年—一六九六年）

とおぼしくて、

思ひきやみ山の奥にすまひして
雲居の月をよそに見むとは

さて傍を叡覽あるに、御寢所とおぼしくて、竹の御竿に麻の御衣、紙の衾なんど懸けられたり。さしも本朝、漢土のたへなる類、數を盡しし綾羅錦繡の粧、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿、殿上人も、まのあたり見奉りし事ども、今のやうに覺えて、みな袖をぞ絞られける。

稍ありて、山の上より濃き墨染の衣著たりける尼二人、岩のかけぢを傳ひつつ、おり煩ひたる樣なりけり。法皇「あれは如何なるものぞ」と仰せければ、老尼涙をおさへて、「花筐（はながたみ）臂（ひじ）にかけ、岩躑躅（つツじ）取り具して持たせ給ひて候ふは女院にてわたらせ給ひ候ふ。爪木に蕨折り添へて持ちたるは、鳥飼中納言伊實（これ）が女、五條大納言邦綱の養子、先

清涼山　支那山西省にあり。五臺山文殊寺のある處。

鳥飼中納言伊實　藤原伊通の子。永暦元年薨ず。（一七八五年—一八二〇年）

五條大納言邦綱　又土御門と號す。治承三年二月薨ず。（一七七九年—一八三九年）

帝の御乳母、大納言典侍局」と申しもあへず泣きにけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿、殿上人も皆袖をぞ濡らされける。女院は世を厭ふ御習といひながら、今かかる有様を見え参らせむずらむ恥かしさよ、消えも失せばやと思し召せどもかひぞなき。宵宵毎の閼伽の水、むすぶ袂も萎るるに、曉起の袖のうへ、山路の露もしげくして、絞りやかねさせ給ひけむ、山へも返らせ給はず、又御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせましましける處に、内侍の尼参りつつ花筐をば賜はりけり。

「世を厭ふ御習、何か苦しう候ふべき。早早御見参ありて還御なし参らせ候へ」と申されければ、女院御涙を抑へて御庵室に入らせおはしまし、「一念の窓の前には攝取の光明を期し、十念の柴の樞には聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思の外の御幸かな」とて御見参ありけり。（平家物語）

孔子　周の聖人。名は丘、字は仲尼。（西暦前五五一年―前四七九年）

子路　姓は仲、名は由、子路はその字。孔門十哲の一。（西暦前五四三年―前四八〇年）

曾皙　名は點。曾參の父。

冉有　名は求、有はその字。孔門十哲の一。（西暦前五二二年―）

公西華　名は赤、西華はその字。

一八　孔子とその徒

孔子は愉快げに一座を見まはした。

其處には子路と曾皙と冉有と公西華との四人の者が靜かに坐つてゐた。隔無い師弟の間に釀されるなごやかな空氣は室一杯に滿ちて居た。

「今日はお互に遠慮抜にして、一つ樂しく語らうではないか。

孔子は微笑を含みながら改めて一座を見渡した。

「其許達はね、いつも『世間から認めてくれぬ、認めてくれぬ』といつて愚癡をこぼしてゐるが、若し假に誰か其許達を認めて任用しようといふ者があつたら、どんな事をしようと思ふかな。

「私の抱負を申して見ませうか。

いつも出過ぎ者の子路は、孔子の言葉の終るのを待ちかねたやう

に、臆面も無く元氣よく切り出した。

「ああ、聽きませうとも。」

孔子はにこやかに子路の方へ顏を向けた。

「まあ千乘の國ですな。それも列强國の間に介まれて、兩方から絶えず壓迫を受け、その上常に戰爭に苦しみ、もう一つおまけに饑饉續きといふやうな慘憺たる國ですな。さうした國の政治を私の手に委ねられましたら、三年の間には見違へるやうな立派な國に仕上げて御覽に入れます。人民は皆皆勇んで戰場に立つやうになるし、國民の道義心も高まつて、今まで壓迫してゐた周圍の國國も辟易する程な整つた國に致して見ませう。」

「ほう、それはそれは。」

勝ち誇つたやうな子路の姿を見遣りながら、孔子は思はず輕く笑つた。

千乘の國　大諸侯の國をいふ。兵車千乘を出だす國。

「求や、其許はどうぢやな。」

「左樣でございます、まあ五六十里四方か、せめて六七十里四方の小さい國を治めさして頂きましたら、三年位遣つてゐます間には、その國の經濟狀態を安定させまして、國民達が安樂に生活出來る程度位には、出來ようかと存じます。然し、禮儀、音樂といふやうな國民の文化方面まで向上させるなどといふことは、私の力には及びません。その方面は然るべき人の力を借りるより致方がございません。」

「成程な。では赤はどう考へるな。」

「私でございますか。いや私にはとてもそんな大した力はございません。出來ませんことは無論承知でありますが、稽古のつもりで遣つて見たいと思ひますることは。」

「ふむ。」

孔子は何ものかを期待するやうに輕く合槌を打つた。

「宗廟のお祭とか、或は諸侯方の會見の際とか、さういふ晴の儀式にふさはしい禮裝を致しまして、それ等の儀式のささやかな助手として、諸侯方をお輔けして見たいと存じます。無論重だつたお輔けなどは出來さうにも思へません。

公西華は遠慮勝につつましくかう答へた。

曾晳は先程から問答の邪魔にならぬ程に、輕く琴を彈きながら他の弟子達のいふことを聞いてゐたが、問答に心を取られて、琴の手は留守になり勝であつた。

「點よ、其許の考はどうかな。

孔子は曾晳の方へ目を向けて答を促した。

曾晳はぱらりと彈きすてて琴を措くと、靜かに起ち上り、恭しく一禮をして置いて、

「私の願は皆さんと少し趣が違ひますので……。

躊躇して後をいひ澁つた。

「よいではないか。何も遠慮はいらぬことぢや。唯お互に思ふ事をいひ合ふだけぢやものぢ。いうて御覽。

「そんなら申し上げます。さやう、暮春にはもう更衣の用意も整うて、身輕ないでたちで、五六人の若者と七八人の子供でも連れて、あの沂水の邊をぶらぶら散歩して、のんびりと溫泉にでも這入りまして、なごやかな陽を浴びながら、また晩春の野を辿りませう。さうしてうつすり汗ばんだ身體に、祭壇の森の木蔭で一風入れて、聖

沂水　支那山東省濟寧道沂水縣。

孔子と門人

者の德を頌へた歌でも謠ひながら、悠悠家路へ歸りたいものです。いや埒もない願でございます。

から答へた曾晳の顏には、あの春の陽を見るやうななごやかな思が溢れてゐた。

孔子は曾晳の言葉を聽き終ると、心の底から感歎したやうに、

「結構ぢやな、結構ぢやな。俺は其許の仲間入がしたいものぢや。

さも滿足げに、孔子は更に一座を見まはした。

三人の弟子達はそれぞれ孔子の座下から退いて、後には曾晳一人が殘つてゐた。

「先生、あの三人の人達の申し上げた考はいかがでございませうな。

曾晳は孔子の心を探るやうに訊ねた。

「なに、皆それぞれ自分の思ふことをいひ合つたまでぢや。

安藤圓秀　漢學者、愛知縣の人。東京帝國大學東洋哲學科出身。國學院大學教授。

「でも先生はさつき由の申したことをお哂ひになりましたが、あれはどういふ譯でございますか。

「はははは、あれか。

孔子は面白さうに又微笑した。

「あれはね、一體國を治めるには禮讓といふ事が大切ぢや。治める者は謙讓で無ければならぬのぢや。ところが、肝腎な國を治めるといふ由のいひ方が、其許も聞いてゐたらうが、如何にも不遜ないひ方であつたから、それで哂つたのぢや。あれが由の癖ぢやよ。

（安藤圓秀―孔子とその徒）

子曰ハク、能ク禮讓ヲ以テ國ヲ爲メムカ、何カ有ラム。禮讓ヲ以テ國ヲ爲ムルコト能ハズンバ、禮ヲ如何セム。（論語）

一九　赤壁賦に擬する文

赤壁賦　宋の文豪蘇東坡の作。前後の二篇あり、これは前赤壁賦に擬したるもの。

桂、大井　京都府葛野郡にあり。上流を大井川、下流を桂川といふ。

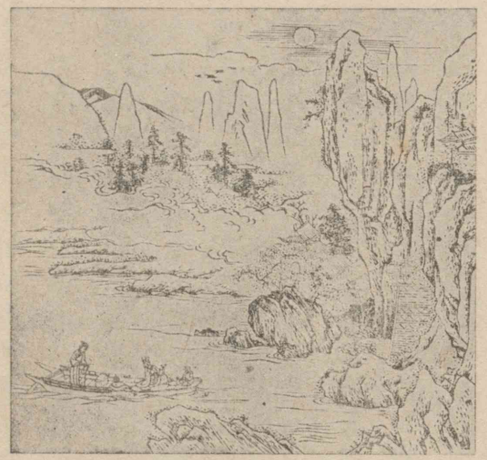
文月のもちの夕さり、友だちと舟を浮べて、桂より大井にのぼす。吹く風は涼しきものから、立つ浪もなし。杯をあげてまらうどに勸め、折につけたる古言どもうち誦しなどする程に、月東の山のはを出でて、ややさし昇りゆくに、岸根の松の葉かずもよみぬべく、水の光は空や水とも見えわかねば、天の川にやのぼりなむ。棚機つめに宿やからまし。雲をふみ風にのる身とさへぞ覺ゆるや。かかれば酒たけなはにして、樂しさのあまりに舷を控へて、

久方の月の都に舟はてむ
名も桂てふ川瀨のぼりて

とうたふに、まらうどの笛を好むが、これにあはせて吹きすさぶ。その聲秋風の恨をそへ、慕ふがごと歎くがごと、あまりの聲ほのかに絲すぢの心地して、遠山の鹿の音にかよひ、賤が砧を催すらむかし。おのれまづ心しなひて、かたちを改めて問ひけらく、「なぞしもかかるや」。まらうどのいはく、『紅葉のみふね船よそひせり』と聞ゆるは源帥の歌にあらずや。白河院この川に御幸ましまして、から歌、やまと歌、絲竹の三つの船よそひ給ひ、おのおのその業に堪へたる人を船をわかちて乘せさせ給ひし時、源帥おくれて參り、岸に膝つきて、『いづれの船にまれ寄せ給へ』と招かれしはここなり。そのざえまたたぐひあらじを、その人今いづこにありや。まして君とわれと今日この遊するも、空にたなびく絲遊、水

紅葉のみふね云云　新千載集に出でたる源經信の歌。上句は「いにしへの迹をたづねて大井川」。

源帥　源經信。道方の子。博學多藝、三船の才として藤原公任と竝稱せらる。權大納言、太宰權帥等に歷任す。承德元年薨ず。（一六七六年―一七五七年）



赤壁泛舟（唐土訓蒙圖彙）

に結べるうたかた、いつまでありと頼むべき身ぞ。死なぬ藥は求めむ道なく、老いせぬ水も名のみ流れぬ。さは心のなげきを聲に洩らすのみ」。おのれいふ「君この月と水とを見よ。逝くものはこの如きも未だ逝かず、盈ち缺くるものはかの如きも遂に衰へず。はた變らふをいへば、天地も目わたる鳥のとめぬがごとなむある。變らぬをいへば、物と我とまさきづらの絶ゆる時なし。また何をか羨みなむ。そもそも天地のあはひ、物皆あるじあり。わが物にしあらざらば塵ばかりも取ることなからむ。只さざ波よする風の清らに、雲もさはらぬ月のあかき、耳によろこび目に樂しむ。されどもとどむる者なく、用ゐれども盡きず。君とわれとかなへるものか」。友がき笑ひてまた更に杯をめぐらす。醉ひしれて共に舟のうちにねぶり、しののめの空をも知らず。（伴蒿蹊――譯文童喩）

伴蒿蹊　國學者。名は資芳、閑田子と號す。近江八幡の人。廬庵、澄月、慈延と共に和歌の四天王と稱せらる。文化三年歿す。（一三九二年―一四六六年）

二〇　狂文三篇

一、鍾馗の贊

大臣と稱すれども、隨身、舍人もしたがへず。降魔の靈驗ありながら、鎭座せる社も見えず。顏に、手足に朱をそそぎて、拔身を執つて振りまはす。もしなま醉かと見てあれば、柏餅を引窓からのぞく。下戸か上戸かわくべからぬ文武兼備の進士の垂迹、げにちはやぶるかみ戟、あふげばいよいよ軒にたかし。

鬼すまぬわがおほ君の國なれば
鍾馗の劍のぬきがひもなし（六樹園飯盛――東なまり）

鍾馗（山田道安筆）

鍾馗　唐の玄宗の時の下第進士の傳說化せられたるもの。

六樹園飯盛　本名石川雅望、通稱五郎兵衞。江戸の人。宿屋を業とす。國文和歌に通じ、狂文狂歌をよくす。晩年武州府中に居る。天保元年閏三月歿す。（一四一三年―一四九〇年）

偃鼠河に云云　莊子、逍遙遊篇に出でたる語。

夜もあけば　伊勢物語に、夜もあけばきつにはめなむくだかけのまだきに鳴きてせなをやりつる」。

漢の張湯云云　張湯、幼時、肉を盜みたる鼠を捕へ、その罪を劾し、これを磔せしこと、史記に見えたり。

石見銀山　鼠取藥。

西寺の老鼠　儘馬樂、老鼠に、「西寺の老鼠、わか鼠、おんもつんづ、けさつんづ、云云」。

むらさきの云云　論語に、「子曰、惡二紫之奪一レ朱也」。

四方赤良　蜀山人、大田南畝の戲號。德川幕府の家人にして狂歌狂文を以て一世に鳴る。文政六年四月歿す。（一七四二年—一八四八年）

古人　北宋の蘇東坡。

春宵一刻云云　東坡の七言絶句の起句。

鳳來山人　平賀鳳溪の戲號。名は國倫、別に天竺浪人、森羅萬象、福内鬼外等の號あり。讃岐の人。博物學者、戲作者。安永八年十二月歿す。（一三七三年—一四三九年）

二、鼠を責むる詞

偃鼠河に飲めども腹に滿つるに過ぎず。汝なんぞわが肉池を飲み乾して、わが印石をして顏色なからしむる。夜も明けば猫にはめなんか、日が暮ればおとしにかけんか。地獄おとしか、極樂おとしか。罪の輕重を枡おとしにはからば、漢の張湯がためし無きにしもあらねど、もし白鼠と内緣あらば、大黑殿のおぼしめしもいかがと思ひて、石見銀山一等をゆるし、鼠衣を剝ぎ、鼠算の過料を取り、壁の穴穴、桁の隅隅、のこらず追放するものなり。このおもむきを西寺の老鼠よりわか草のはつか鼠にいたるまで、よくよく申しきかすべきものなり。

むらさきの外ににくきは肉いれの
朱をうばへる鼠いろかな　（四方赤良—四方のあか）

三、浮世

古人「春宵一刻價千金」とめつたに高ばれば、又浮世を三分五厘と捨賣にする男もあり。然れども、春宵一刻に千金出して買うたたはけもなく、三分五厘に賣つてしまふ出來合の浮世もなし。いかにロから地代の出ぬものなればとて、出るままのいひたい事、つまる所はよくもあしくもいひなし次第の浮世にて、浮世の定めなきは人の心の定めなきなり。聖人も父母の國を去り給ふは、魯國ひろしといへども、馬の合ひたる相手なき故と見えたり。また程子に逢うて蓋をかたむけ、しびりの切れるほどの長話は、初對面から心の合うたるが故なり。心合はざれば肝たましひも仇かたきの如く、心が合へば四海みな兄弟ともなる。酸いも甘いも喰うてみたる上のことなり。（鳳來山人—根南志草）

二一　日本文學研究の新意義

我我日本國民に取つて生命の糧であり、力であるものは國文學である。取り出しても盡くることなく、一時代から次の時代へと、絶えず我我の內的生活に糧を供してくれる寶庫は、我が二千年來の國文學である。

我我は國文學を知り、國文學に親しむことに由つて、常に日本國民たる生命を新たにして行くことが出來る、眞の日本國民として反省と自覺との機會を與へられてゐる。我我は生まれて日本民族である、日本國民である。何としても他の民族ではあり得ない、又他の國民ではあり得ない。それは偶然に日本といふ國土に生まれたが爲ではない。日本民族の血を引き、日本國民の生命を生命として享けてゐるからである。

血に由つて成されてゐる國民の結合は無機的な結合ではない。有機的な結合に成れる國家は機械的な國家ではない。爭ふべからざる血は特殊なる民族性を作り、民族精神を作り、この民族性、民族精神が有形に又無形に國家を形成してゐる。

我我は日本民族として生くる外に生くべき道は見出し得ない。而して國家に由つて民族共有の生命の實現に力め、民族精神を世界に擴充するを圖ることが、我我の箇人として、又國民として生くべき唯一の道である。

國民の文學は國民の精神をさながらに寫した鏡である。かるが故に、英吉利文學は英國民に取つて最も尊い文學である。佛蘭西文學は佛國民に取つて最も大切な文學である。獨逸文學は獨國民に取つて最も愛すべき文學である。我我日本國民に取つては、日本文學の外に、世界の何處にもより以上に尊い大切な愛すべき文學は

あり得ない。我我は自己の生命を他人のそれに比較して、これを評價するやうな、自己に冷酷な行爲はしたくない。我が國民精神の表現である國文學を外國文學に比較はしても、その價値の比較には及びたくない。よしそれが高く評價されようと、低く評價されようと、國文學は我我日本國民の爲には唯一のものであり、如何ともし難いものである。

我我はその本質を究め、益、これを充實せしめ展開せしめることに努めればよい。又それより外になすべき道は持たない。我我は我我に生命の力を與へてくれる二千年來の歌人、物語作者、隨筆日記の筆者、軍記物語の著者から、近世の各種樣式の文藝の作家達に心からなる尊敬を捧げたい。そしてそれと同時に、古典文學の筆寫、蒐集、整理、訓詁、註釋、批評の事業に從事して、我我に古典文學に親しみ得べき便宜を與へてくれた國文學者達にも、同樣の敬意を保ちたい。

文學に國境は無いやうにいふ人もある。或程度までは承認せらるべきことである。然し又一面からいへば、民族的、國民的の血の色の鮮かなものは文學である。國語は國民の內にその職能を全うするばかりでなく、その國語を解するものには、外國人にも同樣に、その職能を盡し得るとはいへど、單語、文章の持つ意味はとにかく、その中に脈打つてゐる全精神を些の遺漏なく把握し得るものは、その國民を措いては決してあり得ない。かるが故に、英吉利文學は英國民をして研究せしめ、佛蘭西文學は佛國民をして研究せしめ、獨逸文學は獨國民をして研究せしむるが最も適當であることに論はないが、民族關係の複雜であり、國際交涉の古來久しく、國語組織の甚だ相似た西洋諸國に於いては、外國人で他國文學を研究することも妨げないかも知れない。併し我我のやうな特殊な民族を有

し特殊な國家を有し、世界の國際關係から久しく隔絶されて、特殊な生活を營んで來た國民の、その系統を異にした特別な組織を持つてゐる國語に表はされた文學は、特に國民的の色の鮮かなものであることはいふまでもない。隨つて我が國文學の研究は、獨我我日本國民のみなし得べき業ではあるまいか。

我が國民の過去を振り返つて見ると、亞細亞大陸地方から支那や印度の先進文化を、始めて我が國に輸入したのは甚だ遠い昔のことである。その時代に於いては、我が國民はまだ素樸の狀態にあつたから、彼の國の文化の燦爛たる光輝に接しては、驚異から羨望、崇拜の心を向けて熾にこれを輸入し摸倣した。內なるものを省みてよくこれを育みそだてるに遑なく、彼に學ぶことに努めた。制度に於いて、服飾、家屋に於いて、藝術に於いて、彼の影響感化を受けたところは甚だ多かつた。學問、思想、文學に至るまで、追隨と摸擬とに力を致してゐた。これが爲に當時の文化は、國民の獨創力の甚しく缺乏したものとなつてゐた。かくして國家を支配した政治の實權は、貴族階級から武家階級へ移り行き、王朝時代、武家時代と時代は變り行つたが、外國崇拜の精神は絶えず續き、拜外の迷夢は依然として國民の間に覺めなかつた。

偶〻江戸時代に至り、幕府は外國交通の道を杜絶したけれども、多年彼の感化を受けてゐた國民は相變らず拜外の夢に酣醉を貪つてゐたが、その時代の精神の中からゆくりなく復古の唱道の聲が聞え出した。「古に復れ」といふ聲が、天籟の如く國民の耳朶に響いて來た。復古の精神は昔のままの社會を再びこの地上に現さうとする精神ではない。古代の素樸な精神の中に人間の眞精神を見出し、日本人の眞の相を見出して、それに復らうとする精神である。長い年月の間に知らず識らず人間性の眞から離れて來てゐる生活を、

賀茂眞淵　遠江の人。岡部氏。縣居と號す。江戸に學を講ず。明和六年十月歿す。國學四大人の一。（一三五七年―一二四二九年）

自覺的に本來の人間性にひき直さうとする精神である。外國、他民族の感化影響の爲に晦まされた民族特有の精神の發揮に返らうとする精神である。「古に復れ」といふのは人間本然の性に復れ、民族本然の相に復れといふのである。賀茂眞淵は人間の眞の精神を萬葉集に見出して、萬葉集の研究、萬葉風の和歌を提唱し實行した。本居宣長は日本人の眞の相を古事記に見出して、古事記傳の著述にその生涯の大部分を捧げたのである。

これ等先覺の提唱や實行に由つて、拜外の迷夢は一部破れかけたのであつたが、江戸末期に至つて、外國の要求に迫られて、已むを得ず當局は鎖國の制を撤廢して、ここに西洋諸國との交通が開かれた。ここに於いて、西洋文化を我が國民の眼から覆うてゐた幕は切つて落されて、我が國民は再び外國文化の光に眩惑されてしまつた。國際的の地位を高め、國力を增進して、彼等と世界に對立するには、先づ彼等の所有するものを我に得なければならぬと知つた敏捷な我が國民は、一千餘年前の國民がなしたと同じやうに、外國文化の輸入摸倣に努力した。さうして今日に於いては、最早その點では多く彼に劣るところなきまでに漕ぎつけたのである。拜外の精神は對象を異にして、又熾に動き始めた。かくて夢から夢へと移り來つて、今なほこの夢を續けてゐる。この夢の中に明治、大正の時代も何時しか過ぎて、今や昭和の御世となつた。

世界大戰爭はいろいろの意味で世界の劃期的大事件であつた。この事件に覺醒され刺戟されて起つた改造の機運は、今や世界に充滿して、各方面の改造は今現にその途上にあると見えるのである。西洋文化の眞相がこの大事件に由つて遺憾なく暴露されて、これに對する批判の眼が冷かに輝き始めた。そして明かにその弱點を認識するに至つたのである。それと共に、これまで多く閑却され

てゐた東方文化が、世界の注視の的とならうとしてゐる。物質的から精神的へ、分析的から綜合的へと、學界の推移して行かうとする傾向が見え出して來た。數年前から西洋學者の東洋研究、日本研究に向ふ傾向は、これを語る事實である。

今や世界國際の關係、國民の交渉は實に近く且密である。一隅を叩けば、他の隅隅へ直ちに響を傳へる。我が國に於いても時を同じうして、各種改造運動とともに、古典復興、國文學研究の風潮が何處からともなく起つて來た。拜外の迷夢は先づ若い人達の中から覺めかけて來た。老人達が無自覺に拜外の鈍い空氣の中に逡巡して、舊習舊慣の保守に腐心してゐる中に、却つて若い人達の中に、自覺的な活動、思索がいろいろと起りかけてゐる。改造の聲の中に、外國の束縛を脱して、自國民の生命を擴充して行かうとする聲が聞かれる。この強い精神は、老人達の中でなくて、若い人達の中に聞かれるやうになつた。新忠君論、新愛國運動は若い人達を中心として起つたものではあるまいか。自國を凝視し、日本國民自身の眞の相を見出さうとしてゐる熱意は、確かに若い人達の中に動き始めたものである。この熱意は少數專門學者の提唱宣傳に基づく一時的の現象ではあるまい。それは若くして西洋文化の研究に功を積んだ人達の間に、かかる機運の動いてゐる事實に徵しても知ることが出來ると思ふ。

この機運は、これを一言に纏めれば、復古精神の勃興である。「古に復れ」「日本國民のその元に復れ」「外國精神の束縛を脱せよ」といふ精神である。荷田春滿や賀茂眞淵が二百年前に唱へ出して、本居宣長や平田篤胤等に繼承されて、大いに國民を警醒し、明治維新の大業を成就した根本を培養した精神と同樣の精神である。それが今ここに又繰り返されてゐるものといへる。江戸時代の復古主義者に

荷田春滿　本姓羽倉、通稱齋宮。京都伏見稲荷の祠官。元文元年七月歿す。國學四大人の一。（一三二八年―一三九六年）

平田篤胤　通稱大角。秋田の人。天保十四年九月歿す。國學四大人の一。（一四三六年―一五〇三年）

は、世界知識の狹かつた爲に、固陋な偏見に捉へられた弊があつた。今日の復古精神には、かくの如きものを含んではならない。

復古精神は舊い昔の社會や生活をさながらに今日に移さうといふのではない。古代生活や古代文化の中に見出される人間の眞の精神、日本國民の眞の相に復歸しようとする精神であらねばならない。因襲の世界から本然の世界へ、いびつの世界から正しき世界へ、虛僞の世界から眞實の世界へ復らうとする精神であらねばならない。而してかかる人間の眞の精神、日本國民の眞の相は、これを古典文學の世界に見出すべく、本然の世界、正しき世界、眞實の世界は、これを國文學の中に見出すべきであるから、復古精神には古典への憧憬、國文學探究の精神の伴ふを常とするのである。

かやうに復古精神の勃興、古典復興の新現象に促されて、國文學の眞の光が次第に世に出でつつあるの事實を見るのではあるが、なほ我我學徒の爲に殘された未開墾の荒蕪地も少くないし、新考察、新研究に遺された餘地は極めて多いのである。獨、學者の研究の餘地が多く遺されてゐるばかりでなく、民衆の理解には更に多くの餘地の存することを思ふのである。專門學者の努力はその方に向つても前途遼遠の感を免れないのである。（藤村作―日本文學講座）

藤村作　國文學者。文學博士。東洋大學學長。東京帝國大學名譽教授。福岡縣柳河の人。明治八年生まる。

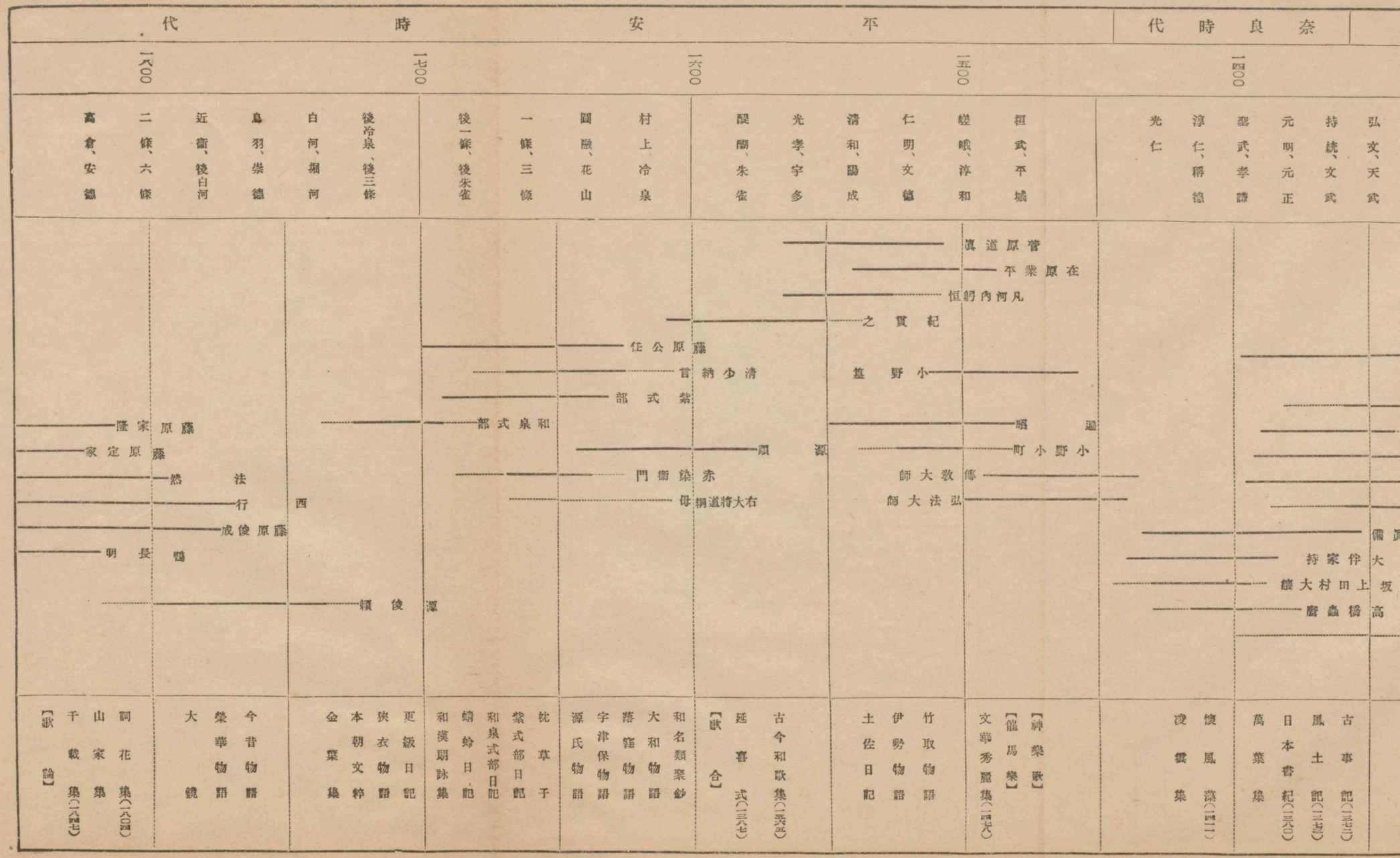
新編
中等國語讀本（新制版）卷九終

上古・中古文學一覽

紀元	天皇	作者	作品
元	神武	神武天皇	
一〇〇	武烈、繼體、安閑、宣化	日本武尊	【阿直岐來朝】（九四四）
		稚郎子	【王仁來朝】（九四五）
			【史官を置く】（一〇六三）
二〇〇	欽明、敏達	皇子厩戸	【歌謠】
	用明、崇峻		【祝詞】
三〇〇	推古、舒明		【憲法十七條】
	皇極、孝德	南淵請安	【壹命】
	齊明、天智	舍人親王	
	弘文、天武	柿本人麻呂	古事記（一三二）
	持統、文武	太安麿	風土記（一三三）
	元明、元正	大伴旅人	日本書紀（一三八）
	聖武、孝謙	山上憶良	萬葉集
	淳仁、稱德	山部赤人	懷風藻（一四一）
	光仁	吉備眞備	凌雲集
四〇〇		大伴家持	
		坂上田村麻呂	
		高橋蟲麿	
		笠金村	
奈良時代			
五〇〇	桓武、平城	菅原道眞	【神樂歌】
	嵯峨、淳和	在原業平	【催馬樂】
	仁明、文德	凡河内躬恒	文華秀麗集（一四七）
	清和、陽成	紀貫之	竹取物語
		小野篁	伊勢物語
		遍照	土佐日記
		小野小町	
		傳教大師	
		弘法大師	
平			

源

新編中等國語讀本（新制版）卷九終


奈良時代
平安時代
一四〇〇
一五〇〇
一六〇〇
一七〇〇
一八〇〇
弘文、天武
持統、文武
元明、元正
聖武、孝謙
淳仁、稱德
光仁
桓武、平城
嵯峨、淳和
仁明、文德
清和、陽成
光孝、宇多
醍醐、朱雀
村上冷泉
圓融、花山
一條、三條
後一條、後朱雀
後冷泉、後三條
白河、堀河
鳥羽、崇德
近衛、後白河
二條、六條
高倉、安德
菅原道真
在原業平
凡河内躬恒
紀貫之
藤原公任
清少納言
小野篁
紫式部
和泉式部
源頼光
赤染衛門
右大將道綱母
源頼朝
藤原隆家
藤原定家
法然
行西
藤原俊成
長明
源俊頼
小野小町
遍照
大師傳
弘法大師
備前
大伴家持
坂上田村大麻呂
高橋蟲麿
懷風藻(一七二)
浪華集
古事記(一七二)
風土記(一三七)
日本書紀(一三八)
萬葉集
【神樂歌】
【催馬樂】
文華秀麗集(一四七)
竹取物語
伊勢物語
土佐日記
古今和歌集(一五五)
延喜式(一三八七)
【歌合】
和名類聚鈔
大和物語
落窪物語
宇津保物語
源氏物語
枕草子
紫式部日記
和泉式部日記
蜻蛉日記
和漢朗詠集
更級日記
狭衣物語
本朝文粹
金葉集
今昔物語
榮華物語
大鏡
詞花集(一八〇)
山家集
千載集(一八七)
【歌論】

時代	安土桃山時代	江戸時代
三〇〇		
後柏原	後奈良	正親町	後陽成	後水尾	後明正
義澄	義稙	義晴	義輝	信長	秀吉

藤原惺窩

細川幽齋

松永貞德

西山宗因

中江藤樹

里村紹巴

【連歌】

【俳諧】

犬莵玖波集（三二四）

【御伽草紙】

近古文學一覽

時代	平安時代・鎌倉時代・建武中興・吉野時代・室町時代
紀元	一九〇〇 二〇〇〇 二一〇〇 二二〇〇
天皇	二條 六條 高倉 安德 後鳥羽 土御門 順德 仲恭 後堀河 四條 後嵯峨 後深草 龜山 後宇多 伏見 後伏見 後二條 花園 後醍醐 後村上 長慶 後龜山 後小松 稱光 後花園 後土御門 後柏原 後奈良 正親町
武家	賴朝 賴家 實朝 義時 泰時 時賴 長時 時宗 貞時 師時 高時 守時 義滿 義持 義教 義政 義尙 義澄 義稙 義晴 義輝 信長
作者	藤原俊成 法然 鴨長明 源實朝 藤原家隆 藤原定家 親鸞 日蓮 阿佛尼 西行 吉田兼好 北畠親房 源光行 藤原爲相 一條兼良 太田道灌 藤原惺窩 細川幽齋 飯尾宗祇 宗良親王 山崎宗鑑 頓阿 二條良基 松永貞德 三條西實隆 西山 觀世清次 宵柏 里村紹巴
作品	水鏡 方丈記 新古今和歌集(一八六五) 金槐和歌集 保元物語 平治物語 平家物語 源平盛衰記 東關紀行 十訓抄(一九一三) 古今著聞集(一九一四) 宇治拾遺物語 十六夜日記 玉葉集(一九七三) 増鏡 徒然草 神皇正統記 風雅集(二〇〇六) 新葉集(二〇四一) 太平記 【謠曲】 【狂言】 曾我物語 義經記 【連歌】 【俳諧】 犬菟玖波集(二一七四) 【御伽草紙】

江戸時代	安土桃山時代	室町時代	建武中興・吉野時代	鎌倉時代	平安時代
		三〇〇	二〇〇	二〇〇〇	一九〇〇

後水尾正	後陽成	正親町	後奈良	後柏原	後土御門	後花園	稱光	後小松	後龜山	長慶	後村上	後醍醐	花園	後二條	後伏見	後宇多	龜山	後深草	後嵯峨	四條	後堀河	仲恭	順德	土御門	後鳥羽	安德	高倉	六條	二條
	秀吉	信長	義輝	義晴	義稙	義澄	義尙	義政	義敎	義持	義滿		守時	高時	師時	貞時	時宗	長時	時賴	泰時	義時	實朝	頼家	頼朝					

藤原俊成
法然
鴨長明
源實朝
藤原家隆
藤原定家
親鸞
日蓮
阿佛尼
四條行
北條義時
藤原光行
吉田兼好
島親房
藤原爲相
一條兼良
太田道灌
飯尾宗祇
宗良親王
頓阿
二條良基
清次
世觀
藤原惺窩
細川幽齋
宗鑑
山崎宗鑑
松永貞德
三條西實隆
西山宗因
中江藤樹
宵柏
村上紹巴

源平盛衰記
徒然草
東關紀行
十訓抄(一二五二)
古今著聞集(一二四四)
宇治拾遺物語
十六夜日記
玉葉集(一二七二)
增鏡
神皇正統記
風雅集(一三〇六)
新葉集(一三四一)
水鏡
方丈記
新古今和歌集(一二〇五)
金槐和歌集
保元物語
平治物語
平家物語
太平記
【謠曲】
【狂言】
曾我物語
義經記
【連歌】
【俳諧】
犬莵玖波集(一三七四)
【御伽草紙】

昭和十二年五月八日印刷
昭和十二年五月十二日發行
昭和十二年十二月二十五日訂正印刷
昭和十二年十二月三十日訂正發行

新編中等國語讀本（新制版）

定價	
卷一、二各金六拾五錢	卷三、四各金六拾六錢
卷五、六各金六拾壹錢	卷七、八各金五拾六錢
卷九、十各金五拾貳錢	

編者　金子元臣

發行者　東京市神田區錦町一丁目十六番地
株式會社明治書院
取締役社長　三樹退三

印刷所　東京市神田區三崎町二丁目一番地
株式會社明章印刷所
印刷者　細谷祐三

發行所　東京市神田區錦町一丁目
振替口座東京四九九一番
株式會社明治書院
電話神田(25)二一四七番(3)

不許複製

廣市
五、二十
吉谷平覺次